

論文

「決定的瞬間」についての語りの考察

—ある大学教授のライフストーリーを手掛かりとして—

塚田 守

一、はじめに

人生には決定的と思える瞬間がある。そして、人々はその瞬間について繰り返し物語ることが多い。本稿は、そのような「決定的瞬間」が人生の転機になったという一人の大学教授のライフストーリー¹を聞き取ることで、その瞬間に至る過程とその意味また、それが与えた影響などについて、本人が語ったストーリーをまとめ、考察するものである。

一般的に、その瞬間は、人との出遭いである場合がある。ベストセラーになった『だから、あなたも生きぬいて』では、その瞬間とは、大平さんのおっちゃんが光代さんに大声で怒鳴った瞬間であった。その瞬間が転機となり、中学卒業後から「道を外した」彼女が、人生を肯定的に考えるようになった。その後、さまざまな資格を取り、最終的には、中学しか卒業していない彼女が司法試験に合格し弁護士になった。まさにそのきっかけは、大平さんという意味ある人との出遭いであった（大平 二〇〇四年）。『私たちの中にある物

語』の著者、ロバート・アトキンソンにとってもまた、キャンベルとの出遭いは「真実の瞬間」になり、人生について葛藤していた問いが理解できた瞬間であった（アトキンソン 二〇〇六年）。その瞬間をきっかけとして、人生に対しての態度が大きく変わっていったと語っている。この二人にとっての人生の転機は、「意味ある他人」との出遭いであったと言えるであろう。

また、その瞬間は、自らの生き方に対する態度の変化による場合もある。『あなたの人生論』の著者塩尻公明は、劣等感や執着的恋愛に長い間悩み続け、生きながらの地獄を経験していた。文学書、哲学書を読み、その悩みを解決しようとしたが叶わず、宗教に関する文献を読み、禅を実践し克服しようとした。禅を修業することで、ある程度の問題解決ができたが、それでも解決できない時には、「受け取りの一手」という態度により、起こることをすべてを積極的に受け入れることで、問題そのものは解決しないが、問題は問題として残したまま、救われるようになったという。現実の「受け取りの一手」の態度に徹した時、塩尻公明は、すべてのことに感謝し、人生で起こることについての意味を見出し、何事にも積極的に生きることでできるようになったという（塩尻 一九六九年）。自らの人生に対する態度の変化の「瞬間」がきっかけになり、人生の転機が起きた例と言える。

さらに、自己への執着心から解放され、「自分の外の力」を感じた時に、その瞬間が起こる場合もある。カウンセラーの諸富さんは、中学生の時に太宰治の『人間失格』を読んだことで、自分の利己的

な生き方に苦しみ、生きていることの意味を常に問う苦しみを経験することになった。世の中から落伍していく主人公からの「人間、失格」というつぶやきを読み、「より適応的に生きている他の登場人物たちの内面に潜む打算やエゴイズム、その醜さや空虚さなど」を感じ、当時、自分のエゴイズムや内的空虚をぼんやりと意識していた諸富さんは、自分自身の内面を直視せざるを得なくなり、泥沼のような苦しみ吸い込まれていくことになった。そのように苦しんでいた諸富さんに大きな転機が起こる。「私が救われた瞬間」が起こったのは、大学三年生のある秋の午後だったと鮮明に覚えている。いつものように、「何のために生きているのか」「どう生きていけばよいのか」という問いにとりつかれ、「前々日から一睡もできず、心身共に憔悴しつくしていた」諸富さんは、「ある瞬間、なぜか、ふと魔がさして、もう七年間も抱えつづけ、苦しみつづけてきたその問いを突然、放り出して……もう、どうにでもなれ」と思った。このようにして、問いを考えることに力尽き、問いを放り出したあとでも、なんら倒れることなくたつことができている」ことに驚き、自分が立っていられるのは、決して自分自身ではなく、「何か、他の力」「何か、ほかの働き」によってだと実感することになる。このことを悟り、「私はこのとき、目覚めたのです」と転機が起こった瞬間のことを鮮明に書いている（諸富 二〇〇四年・二〇五―二二〇頁）。

人との出遭い、自己の態度の変化、さらに、自分の外の力の気づきという「決定的瞬間」が人生の転機になることがあるのではないかという仮説に基づき、一人の大学教授のライフストーリーに耳を

傾け、その教授が今の自分になるまでの過程を人生における「決定的瞬間」の語りに注目し、そのライフストーリーを描写し、論じてみたい。

二、T先生のライフストーリー

筆者のT先生との出遭い

大学教授として、さまざまな学生たちに強烈なインパクトを与えてきたT先生は、「どん底生活」の中で、「神の声」を聞き、人生の変革が起こったと言う。筆者が浪人中に、たまたまアルバイトで予備校講師をしていたT先生にその話を聞いた。「みなさん、夢を持つて生きてください。"Where there is a will, there is a way"という言葉を知っていますか、志あるところに道あり、ということですね。夢を持てば、それはきつと叶います」と大きな声できっぱりと言いつつT先生の迫力に圧倒された。「神の声」を聞いたというストーリーはにわかに信じがたいものであったが、筆者には、T先生自身が「神」のように思えた。浪人中であり、何かに頼りたいという筆者の依存心の反映であったかもしれないが、T先生は、「神」と思えるほどのインパクトのある存在だった。その日からもう三十八年の年月が流れた。「どん底生活」で「神の声」を聞き、人生の転機が訪れたというその瞬間のことを今、もっと知りたいと思った。何が起こればあれほどバワフルな人間になれるのか、それを知りたいと

思った。本節は、T先生の人生における「決定的瞬間」とはどのようなものであったのか、そして、その瞬間後、T先生はどのように変革していったのかについて、T先生の「語り」と著作を手掛りとして、T先生が物語るストーリーに迫り、先生の人生における転機について考察する。

中学生までの頃

敗戦の時の経験がT先生の原点だという。敗戦の日まで、日本は勝つと信じさせられていた。大本営発表の嘘は後で気づくことだった。小学生から中学生にかけて、国民は「陛下の赤子」と言われ、一般の人々は、天皇に命をささげる存在であった。だから、神風特攻隊で死ぬことが先生の生きる目的だった。小学校六年生の時、自分の人生は二〇歳までだと思っていた。T先生は、運動神経が良くなく、体育は「乙」だったので、飛行士になるために体を鍛えていた。敗戦後、当時T先生たちを厳しく訓練していた配属将校に偶然出会うことがあった。当時、先生や上級生に対して、五〇メートルほど離れたところからも直立不動で、叫んで敬礼をしていた。あいさつしようと思ったら、その時の将校は逃げていった。多分、自分であることがばれるのが怖かったからではないかと、T先生は言う。今でも、その振り向いて逃げる姿が目に残っているとと言う。これは、当時少年だったT先生にとって、「原体験」である。

敗戦後に起こった大人たちの変化に、T先生は何もかも信じられ

なくなつた。敗戦の知らせを聞いた夏休み後の先生たちの変化。「夏休みまで一生懸命話していたことはどうなったのですか」と先生たちに尋ねると、「日本中が騙されていた」「一握りの軍部に踊らされていた」などという答えが返ってきた。それを聞き、「先生の言ったことを本気で信じていたら、ひどいことになる」と思ったと言う。「今アメリカ中心だが、共産主義政府ができたなら、この先生はどのように言うのだろうか」と思いつつ、「世の中は大きく変わる」と感じたので、「自分の人生の土台になるものは、自分の責任で生じる必要がある」と中三年の時に実感していた。

T先生は大家族の家に生まれ、キリスト教の教会に通う子どもであった。教会に通っていたが、「神様がいます」という確信もなく、礼拝に行っていた。その礼拝に来ていた少し年上のいろいろな先輩たちから影響を受けた。その時の先輩の話について語った。

中学二年の時に、もともと親父がキリスト教で、戦争の間中は日曜学校だったので、子どもの集まり毎週日曜日。それが行かなくなって、戦争でなんだかんだで、で、中学二年になった時に、教会の長老という役名のおじさん、弁護士だったけど、家に来なさって、「T君、中学二年になったら、大人の礼拝に出なさい」と。で、僕はその時に今でも覚えておる、「宗教なんて古臭い。精神なんて脳みその産物だ」と。何と言ってる」って思ったけれども、なんとなく行つたわけよ。そしたら、二年上級生が大勢いた。その上級生、海軍兵学校とそれから陸軍士官学校と行つとった人たちが、教

会に来とったんだね。つまり、道を失ったわけよ。海軍兵学校生ですすごい優秀な連中だった。やっぱり親や牧師や先生と全然違って、同じ中学の先輩に対してね、なんかつながりを感じるでしょ。

そういう人たちの話を聞くのは、「おー」って思うわけ。そういう話いっぱい聞くと、こっちは得るとこいっぱいあるっていうか、教会に通ったよ。牧師さんの話はね、あんまりぴんとこんかった。でも、まあ少しは感動したよ。でも、一番大事なのは先輩たちで。京大の農学部出た人が、その頃上級生だった。「T君これ読め」と。あと東大の法学部出て厚生省（当時）の薬事課長まで行ったSって先輩がいろんな話をしてくれて、この二人にもすごい感化を受けてね。で、その二人が次々と僕に難しい本を貸してくれるわけ。いろんな難しい本を貸してくれたけれども、わからないわけよ。ほんでこんな本どうやったらわかるようになるかしらって思っていた。

教会で出遭い刺激を受けた先輩たち。彼らが薦める本が理解できないことにジレンマを感じていたT先生は、いつかそのような難しい本が読める人間になりたいと思っていた。

地方の高校から東京大学に合格

高校一年の時に、先生に学問的基礎を教えることになるS先生に出遭った。高校一年の時に、変わった大学の先生がいると友だちが言うので、その先生に会いに行った。経済原論の先生だとい

うことだったけれど、好奇心で行くことに決めた。高校三年生の先輩を含め四人で会いに行った。その日は四月の晴れた日で、今でも強烈な印象として残っていると言う。ステッキを振り、声の大きな先生だったと覚えてる。焼け残った塀。門の戸はぎしぎしとするものであった。玄関に入ると本が積んであった。床の間にも山積みの本があった。大学の先生は貧しい、本が多いというのが第一印象だった。その時のことをまったく昨日の出来事のように語る。

どうやったら、こんな難しい本がわかるようになるかなあって。ちようどそういう気持ちだが、かなり強くなっていた時に、先生、「本を読む力をつけてあげようと思う」って。「へえー、そんな先生がいたのか」と思ったよ。「君達、今のこの日本がこの焼け野原から立ち直って、立派な国になるためには、君たちのような若い諸君がぜひともしっかりと自分の頭でものを考えることのできる人に、大人に育ってくれよ。これがぜひとも必要だ」と。「自分の頭でしっかりとものを考える大人になるためには、いい本をしっかりと読む力をつけること。これがまず大事だ」と。で、「その本を読む力をつけてあげる」と。で、「日本語でやってあげてもいいが、日本語は読めると思っ

ているだろうから、辞書をひきまくってとことん調べることはせんだろう。だから、ちようど英語を習っているようだから、英語でやってあげる」と。

「どのようにしたら、本がわかるようになるだろう」という疑問が

あったので、「本を読む力」をつけてくれるというS先生に教えてもらいたいと思った。T先生は思わず「お願いします」と言っていて、他の三人もS先生のところへ週一回通い始めた。

S先生のところで読んだ本は、イギリスの有名な哲学者のもので高校生のT先生たちに理解できるものではなかったが、その本を書き写し、正確に意味を理解する読み方を学んだ。S先生は、読書の基本的あり方について、まず次のように説明したと言う。

ジョン・ラスキンというイギリスの一九世紀の人でね、エッセイストだけれども社会問題も論じるし、文化の評論家みたいな感じ。その原本を、先生、大学ノートの古い大学ノートを切って、それ四人分に手で書き写してくれた。「良い本に出会ったときに、一遍でわかると思うな。何遍も何十遍も読んで、ようやく著者の心理にたどりつくということを確認しなさい」と。それで本を読むということとは、「つるはしで掘る人とよく似てて、金は山のとっぺんにどうぞって積んでなくて、どこかに隠れておる」と。「掘る人はまず呼吸を整えて腕まくりをし、つるはしをよく手入れして、それから腹を決めて一つずつ掘っていく」と。ほいで細かいこと書いてあるんだけれども、「鉱石を砕いて、砕いた鉱石から成分の多いところを選んで、それだけじゃない、感慨深い心という炉に入れて、長時間熟するとやがて、金属の一片が見つかる、それが金だ、それを確保しろ」と。

勉強を教えてもらい、自分の頭の悪さを実感しながらも、諦めずに勉強し始めたT先生であった。他の三人が文章を読んでわかったふりをするのに対して、T先生は、わからないことはわからないと言いつけながら、通いつけた。その後、後の三人は、それぞれの理由を付け、その勉強会を辞めてしまったが、T先生だけは続けた。頭の悪さに落胆しているT先生を褒めてくれた教育者としてのS先生の素晴らしさについて語る。

先生の本を借りてね。みんなだね。ほいで、一、二、三行きた。一段落。「今日はここまで、わかったか」S君、「はい、わかりました」「わかったと思います」って言ったんです。で、Y君、「はい、わかりました」N君、「僕もわかりました」。T君、「わかりません。まったくわからん」と。「遠慮はいい、聞いてくれ」と。「どこがわからんかわかりません。どう言っているか、どこがわからんか言えん」って。「困ったのー」っておしゃって、「じゃあ全部もう一遍やる」と。「じゃあ今度はわかったか」って。僕は、「まだどこがわからなかったかわからん」っていう状態だったの。「困ったのおー。他のみんなは一遍でわかったって言ったぞ」。僕は黙っておる。「もう一遍説明する。今度はよく聞いてなさい」「はい」って言って。三遍目も終わりに近づいた。泣きそうだよ。涙が出そうだね。僕、嘆いた。どう言っているかわからへんのね。どうしようと思ってね。ここで泣き出して逃げ出したら、先生に失礼というか申し訳ないっていう気持ちだし、そうかと言ってわからんのにわかったとは言えんから。

終わってから、「どうだT君」っておっしゃった時に、「先生、やっぱりわかりません」って言ったら、そしたら、先生黙っちゃったから、「お前だけじゃあないな」っておっしゃるかなあと思って、こうしといたら、「T君」っておっしゃるから、「はい」って。「偉いぞ」なんて偉いのかさっぱりわからん。「先生に三遍説明してもらって、それでもわからへんのになんで偉いんですか」って聞いたら、「君は正直でよろしい」って言ったんだね。「この本は、ラスキン先生で習ったとおり、第一級の本なんだ。だから一遍でわかったっていう方が嘘じゃ。わかれというわしの方が無理だ」と。それで「心配いらん」と。「何回も何回も何十回も読んで、何年もかかってやっとようやく少しわかったっていうぐらいの本だ」と。「君は正直でいい」と。で、「心配いらん」と。「今度来る時までに百遍読んできなさい」っておっしゃったから、「先生、意味がわからないのに読むってどういうことですか」って。「音出すくらいならできますけど」って言ったら、「音出すだけでいい」って。「読書百遍意おのずからって昔から言うてのー、百遍読んでこい。次の週まで毎日一〇回読んだら、なんとか一〇〇回ぐらいいく」と、おっしゃったね。

このようにして、S先生の下、英語を学ぶ日々が続いていた。二年生になって予習をして訳しても誤訳が多かったが、三年生になって読めるようになった。その時S先生は、「大卒の資格がある」とまて言ってくれた。S先生の下で英語を教えてもらったことがきっかけになり、大学進学を真剣に考え、S先生のような学者になること

を夢見ていた。そして、三年生になり、大学進学を考える時期になっていた。「人生の土台を作るために」大学に行きたいと言ったけれど、親戚中だれも行っていなかった。親の兄弟たちを含めた十二名の大家族で貧しく、親は「行かんでよい」と言ったが、「行きたいんだ」と言ったら、「一回だけ受けさせてやる」と言ってくれたので、受験することになった。

高校では進路希望調査が配布されていた。進学の志望校欄にどこを書いてよいかわからなかったので、S先生に相談したら、「君は東大だ。心配いらん、私が入れるようにしてやる」と言った。そこで、志望校欄に鉛筆で東京大学と書いた。それを担任のO先生に見せたら「ふざけたことを書く気か」と怒鳴られたが、「ふざけたつもりではないのですが」と答えると、「お前は、この大学がどんなに難しい大学か知っているのか」と言われ、「絶対に入れない」とも言われた。

このように高校の先生に志望校を変更するように言われ、また、S先生に相談した。T先生は大学の先生は高校の先生よりも偉いと思っていた。たとえば、現代国語の試験問題をS先生が見た時、「こういうくだらん問題に答えなくてよい。文章になっていない文、悪文、三流の文章だ」と批判したことがあった。それに、T先生にとっては、S先生は英語を教えてもらいながら、憧れ尊敬していた人物であった。そのS先生が「T君、何をびっくりしとる、君の事は高校の担任よりわしの方がよっぽどよく知とる。君は東大。心配いらん。俺が入れるようにしたる」って言ってくれたので、東大を受験することにした。

東大入試の結果は合格だった。その日を境にT先生は有頂天になっていた。その時の気分を思い出し、ほろ苦い体験として語る。

他のやつが受けるならあれだけど、Tが受けるのは信じられなかったんでしょ。ほいであらゆる先生が心配そうに忠告してくれた。本当だよ。受かったわけ。受かった最初はね、とにかく、誰も受かると言わなかったのにね、受かったでしょ。校長からお祝いの葉書がきたよ。「もって、我が校の荣誉たり」って筆で書いてあった。「なんじゃい、今頃」ってなもんだ。担任も喜びの挨拶に家まで来てくれてね。家まで来てくれて、校長じゃなくて担任よ。絶対受からんって言った担任。「お前が私の希望だ」ってね。それでね、そういう時はこれだ。もうね、Iの町を歩いても、「みんなが俺を見とる」っていう感じ。だって、前代未聞だもんね。つまり、新制大学だから中学が新制高校になって、大学だから前例がないわけ。旧制高校から行ったのは何人もいるよ。でも、新制高校からいきなりっていうのは初めてだったから、みんなが驚くわけ。で、それまでなんか馬鹿にされた分だけね、威張ったわけよ。

周囲の予想に反して、T先生は東京大学文Iに合格することができた。東京大学に合格できて、エリート¹の道が期待されていた。

東京大学に入学して、大学院に進学

大学二年生になり、何を専攻するか迷った。文Iに入学したので、法律に関するいろいろな講義に出席した。法学部志望の学生たちが、「出席を取らない」「採点があまい」などを基準に専攻を決め、「出世競争で生き残る」ことばかりを話していた。このような考え方に「肌が合わない」「気持ちが悪かった」T先生であった。ニューマンを読んだ時に思った「人間の意識の問題」について興味があつた。たとえば、S先生の解説では、経済学を数学的方法で行っているが間違っている。たとえば、茶碗の価値はどのようなかを考える時に、その価値の意味というのは、欲しい人がどれだけいるかで決まる、まさに、人の心の問題である。「欲しいと思う」心は、直接的な現象である。物質世界はその意味では、二次的なデータに過ぎない、という考え方が重要であるとS先生は日頃から言っていた。そのような先生の影響を受けて、人間の意識構造を研究することに興味を持っていた。

「人間の意識構造」の研究に興味を持ち、心理学の教授にも会いに行ったが、実験心理学を行っていたので興味を持てなかった。その教授は、三〇〇匹のねずみを実験する研究をやっていた。そのような研究は、人間の価値意識とはかけ離れたものだとT先生は思っていた。悩んだ末に、S先生に相談したら、T先生に合っている学問は「哲学だ」と言われた。「哲学は難しい学問だと考えられているが、こつこつと続けられようかなる学問」であると言われ、哲学を専

攻することに決めた。

哲学を専攻すると言ったら、「つぶしが利かない」と親が反対した。親戚もやって来て、反対した。Iという地域は商売の街で、お金を稼げるかどうかが重要であるという価値観が支配的であった。N君のお母さんの紹介で「偉いお坊さん」のところに相談に行くことになった。お坊さんは、「どちらに行きたいのですか」とT先生に尋ね、「本になりたい方に行きなさい」と言ってくれた。その後、お父さんに「偉い先生がこう言ってくれた」と言ったら、「私たちは黙って消えてやるから」と賛成してくれた。

東京に出て、もう一人の恩人と呼べるH牧師との出遭いもあった。その牧師は、受験の時、東京でたまたま泊めてもらった人の近くに住んでいた牧師さんだった。「今晚、礼拝があるから」と言われ、行ってみると、H牧師は最敬礼をして挨拶してくれた。子ども二人、奥さんと教会を運営していた。四月から日曜礼拝には欠かさず行っていたが、五月に一回サボったことがあった。サボった後、礼拝に行ってみると「心配していたんですよ」と心から言ってくれた。秋から試験があることを言うと、「試験頑張ってください。お祈りします」とまで言ってくれたことに、まったくの赤の他人のH牧師がこれほど心配してくれるのはどうしてかという疑問を持った。

T先生は、東京には「冷たい気持ち」でやって来ていた。親友のN君が病院に入院していた時、見舞いに行っていたが、一ヶ月後に、「来ないでくれ」と言われていた。その理由として、「君は僕を尊敬しすぎる。尊敬してくれるのは嬉しいけれど、そのうち、幻滅の悲

哀を味わうだろうから」と。T先生としては喜んで行っていたが、見舞いを断られたことで、T先生は、「人間は最後は自分が可愛いんだ。所詮、自分が可愛いだけだ」と思っていた。そのような経験をしたばかりだったので、H牧師と日常的に接し、「このような愛は人間からは不可能だ。身を棄ててかかっている愛だから」と、それにふさわしい対応をしたいと思っていた。「人間は一人ではないのです。何が辛いかというと、愛が通じないことほど辛いことはない」というH牧師の言葉に感謝していたT先生だった。

卒業論文作成で苦勞し、もう提出できないのではないかと悩んでいた頃のH牧師の態度は、T先生にとっては、忘れられない愛を感じるのであった。その当時のことを思い出して言う。

一生懸命やってね。だけれども卒論が大変でね、まとまらんわけ。僕は本当に頭悪いと思うけれども、どんだけ考えてもまとまらん。ほんで、教会のH牧師が、これまた本当にご苦勞をかけたんだけれども、十二月二五日締め切りで、十一月半ばになって、

「今Tさん卒論でまとまらないんで、困ってらっしゃいますね。」

「はい。そうです。」

「私がお手伝いできたら、さしあげるんだけれども、私、生物の教員。できないので、どなたが手伝ってくださいる方いいものかと思つて、探し回ったところの方が」つてね。

「旧制度の大学院生で、五つか六つ年上のNさん。なんでも手伝つてあげるって、お世話になりませんか」つておっしゃったから、N

さんを見たら、本当に優しい顔して、にこっとして。

「僕でよかったらなんでもしてあげるよ」って。

「お願いします」って言ってるね。

それから一カ月毎日通ってくれた。ところが二三日に清書に入った時に、あんまり内容が乏しいので、こんなの駄目だと思って思っちゃった。で、「Nさん、すみません。僕、こんなじゃあよー出さん」と。うだうだうだう言ったら、「T君そう言うなよ。だって、君一年延ばして、来年今頃になって出せる自信があるか。また同じことを言うぞ。人間一遍喧嘩に負けると、負け犬根性がついて負けるのを嫌がる。そしたら、君どうなる。生涯卒業できん。いいから出しなよ」ってね。僕が、H牧師のところに飛んで行ってね。先輩がこういうことを言ったんだと。その頃はH牧師が一番の相談相手。

「先生、僕一年留年する。」

「どうしたんですか。」

「あんまり卒業論文の内容が乏しくて、はずかしくて出せん。」

「そんなにご自分の卒業論文のことを出来が悪いってご自分で宣傳なさる方ないじゃないですか。」

「だって、本当に出来が悪いんですから。ちよつとぐらいいだったら。」

今度はまじめな顔して、「Tさん、卒業論文の出来のいい悪いを判断するのはあなたじゃないでしょ。教授の方がそのためにいらっしやるんですよ。その判断は、教授の先生方のご判断にお委ねするのが学生としての責務じゃないですか」と。

その後、H牧師は「ご無理なさらないように」と言って、教会の中に入っていくって、お祈りをしてくれて、十五分後に帰ってきた。

T先生が「頑張ります」と言ったら、本当に嬉しそうな顔をして喜んでくれた。結局、午前十一時五五分に大学の事務に提出しに行ったら、事務の人も心配して待ってくれていた。H牧師に卒論を提出したことを報告した時、飛び上がって喜んでくれた。H牧師は、T先生にとって、大学時代の心のよりどころであった。

口頭試問で引用も少ないと批判を受けたが、フッサールの原書を読んで自分の解釈を中心とする論文を書き、主任教授のI教授からは高い評価を受けた。「予餞会」で他の学生の前でI教授に褒められた。十八名中二名だけが「優」を与えられ、当時のお金で月、一万五〇〇〇円の奨学金を与えられる「特別研究生」という地位も与えられた。I教授は、「これからお世話になるなあ」と言ってくれたが、五七歳の時、手術の失敗で亡くなられた。その後、教養から本郷に移ってきたK教授が主任教授になった。院生の前で、「I君は評価していたが……」という言い方でT先生は批判された。「主任教授に睨まれたら、生涯だめになる」と言われながらも、修士論文のテーマなどを見せに行った。ざっと見て、「五分損をした」と言われ、その後は冷たい取り扱いをずっと受けることになった。T先生は、友人の手助けを受けながらも、精一杯の努力をして修士論文を提出したが、修士論文には「良」がつけられた。「良」をつけられたということは、博士課程に進むことができないことを意味していた。

博士課程に進学できず、「どん底」へ

博士課程に進学できなかったT先生は、明治学院大学の非常勤講師と家庭教師で生活をし始めた。論理学を一コマ教えるだけの生活であつたが、「三年後には大学の定員が増員される予定になつてるので、それまで忍耐してください」と言われたことで希望を持っていた。しかし、博士課程に在籍した経験がないので、その希望は絶望的であることが分かった。その時の落胆の気持ちをT先生が語る。

H牧師が駆け回って、明治学院大学の夜学の一コマを友人を口説いてもらった。哲学の先生友人だつたから。で、「病弱につき代行」ということで。結局、非常勤講師ってことにしていたら、三年間やつたけれども。一コマだつて、学生はすごい喜んでくれたの。

だもんで、これはうれしいと思って、来年も一コマ。論理学だつたから、哲学史をやらせてほしいと思って、その譲つてくださった先生のところをお願いに行ったの。「先生、もう一コマ、できたら哲学史をさしてください」って言ったら、「もう一コマどころか、二コマも三コマでもぜひ君に」と。「そうですか。ありがとうございまして。」いや、それは先の話で、今は教養に一人定員を増やしてもらう交渉を大学としている最中で、もし増えたら君を第一候補として推薦する」って。「先生、ありがとうございます」って。二年目になつてもまだ話がないから、「先生どうですか」って聞いたら、「いやま

だ定員が増えてない」と。で、三年目の前にしびれ切らして言ったら、「まだ忍耐してください」って。で、もう一人のA先生と知り合になつとつて、「実際のところ、どうなってるんですか」って聞きに行つたわけ。そしたら、「増えることは今交渉中だが、仮に増えたとしても君はだめだ」と。「無理だ」と。「どうしてですか」って。

「博士課程に行つてないから、内規上、駄目だ」って。「論文を仕上げてなくても、少なくとも満期退学ということが条件だ」って言うの。で、僕はショックだつた。

博士課程に入っていることが条件であることがわかり、東大の大学院博士課程に復学することを考え、クリスチャンでもあり、親しみを持っていたY助教授のところに相談に行つた。しかし、そこでも冷たい返答を聞くことになる。

「先生、こうこうこうで、博士課程少なくとも修了してないとどこも就職できないと言われたんですが、どうしたら戻れるでしょうか」って聞いたら、「自分に一つ聞きたいが、今は勉強はどのように進んでいるかい」って。だから、「先生、将来の不安がいっぱいあつて、なかなか思うように進まなくて、今この辺をこつこつとやる」と。「君の話を聞いていると、君はいよいよジリ貧だね。悪いこと言わん。方向転換を考えたらどうだい」って。「方向転換って。どこかの会社に就職するとか。どういうことですか」って聞いたら、「学究として身を立てることを諦めて、就職口を探すことだ」と。

で、「会社とかなんとかで伝票を数えたりする仕事でしょうか」って
言ったら、「うん。そうだ」って。

その時のT先生にとっては、Y助教授の言葉は「死ね」と言われることと同じだった。市ヶ谷の駅で、「これからどうなるのか」と思ったら、足が前に出なかった。足を前に出すことに意味を見出せなかった。虚脱状態で電車に乗って帰った。

その日ひどかったよ。「貴重なお時間を割いてくださって、ありがとうございました。失礼します」ってね。外へ出たよ。で、市ヶ谷の駅だったと思う。下が電車が通ってね。市ヶ谷の駅が見えとってね。雨降とって、これからどうなるって思ったらね、足が前に出ないの。つまり、足を一歩前に出すってことは、何の無意味があるかってことなの。でしょ。そういうふうに思えた。普段そういうこと思わないよ。で、傘を差してても意味ない。で、傘もこんな落としちゃって。で、風呂敷包みに持っていたのも落としちゃってね。

それでも気を取り戻して、職探しをした。日比谷高校に行ったら、校長には、英文科の博士課程を出た人でも難しいと言われた。さらに、別の高校に行ったら、「高校の教育現場では、教師は学問から遠ざかって行く」と聞いたので高校の教師になることを諦めざるを得なくなった。その頃の気分を思い出して語る。

脱力感っていうのはあるんだな。生まれて初めて。で、後でね、美術室の女性の事務員の方が見とったそうでね。誰かの口伝えに聞わってきた。「あのTさん、本当に虚脱状態って感じだった」って。で、今でも思い出す。あの木の古い校舎でね。建て直す前の。ほんで、結局、家庭教師を続けただけでね。ずっと。ある晩何かから帰ってきてね。アルバイトか。金曜日の夜、明治学院行く以外は、週四回家庭教師だ。皆さんが仕事終わって帰られる時、夕空を仰いで、僕は出勤だ、家庭教師の。で、今でも思い出す、夕焼け雲がニュージーランドの格好しとった。それが、「元氣出せ」って。「これからいいことあるぞ」って言ってくれた気がした。昼間うちにいたでしょ。昼飯も食堂に行くとき高いからさ、八百屋に行って、うどんの玉二個とねぎ一束と買ってきてね。とんとんやって食うわけよ。その買い物籠を提げて、坂道を上がるときにね、太陽が背中を押してくれた気がした。「元氣出せ」って。あの感覚忘れん。そんな中でね、ある晩バイトから帰ってきて、干したものの取り込もうとしたら、やつぱりその頃ってね、自分の将来どうなるかって思ったら、真っ暗って感じよ。真っ暗ってね。手でつかめる感じよ。黒さが。実体があつて。そんで、ある晩なんか正常な意識でおるのが耐えられなくなつてね。酒屋に行つてね、酒よう飲まんから、ぶどう酒の甘いやつ買つてね。

非常勤講師と家庭教師だけの生活の中で、自分を励ましながらも生きていたT先生であつたが、生活の乱れから体調を崩してしまっ

ていた。

「決定的瞬間」…「どん底」からの飛躍

世話になっていたM女子大学の学長だったU先生が、「顔色悪いですね。病院に行きなさい」と言ってくれたので病院に行ったら、胃潰瘍だと診断された。レントゲンを撮ったら、実年齢がまだ二六歳か二七歳だったにもかかわらず、推定年齢五〇歳であると診断された。かかった医者に胃潰瘍の重症患者の標本などを見せられ、説明を受けた。若いからということ、切らずに治すということで一ヶ月から二ヶ月入院し回復したが、T先生は絶望的な気分になっていた。

退院してからも、痛みが続き、食生活でも注意をしなければならなそうと思いつつ、絶望感の中で、今までの人生を振り返り、自分を学問の道に導いてくれたS先生のことまで、恨む気分にもなってしまった。

「健康やられて痛になる過程」って言われたでしょ。就職が見つかからんでしょ。「学問諦めろ」って言われたでしょ。で、帰ってきてから、フツサルを読むとしたら、そういう中で読めんでしょ。読めないね。ほいで泣き出した。いろんな。今思うと、この泣き出すっていう人間の機構ってすごいな。メカニズム。潜在意識でしよ。頑張ったのに壊れちゃったわけよ。僕の解釈だよ。ほい

で僕はやっぱり学問も駄目だと言われたとおりだった。その時に初めてS先生のこと恨んだ。先生に出会ったばかりに、頭悪いのに、学問は頭の良し悪しと関係ないってぐだぐだ。それをすっかり信じたもんで、柄にもない哲学科にまで飛び込んでこのざまだ。ちらつと思っただけ、すぐ申し訳ないと思っただけね。

そのように追い込まれる中、T先生は自殺も考えていた。

どっちにしても、もう生きていけんって。僕は人生の道を踏み誤った。この言葉残っておるわ。自分の道を踏み誤った。で、いまさら取り返しがつかん。二八にもなつて、新しい道なんて。当時は思いつかんわけ。で、だめと思ひ込んだわけ。「どうにもこうにも生きていく道がない」と思つて、「死ぬしかない」と思つて。引き出し開けて、機械工作が好きだったからね。すごいのか、自分で作っちゃったの。鉄を切る鋼があるでしょ。その折れたのを研ぎ上げて、よく切れるようになって。ここをまくってこうやったけども、焦つてどうにも脈がわからんわけよ。ほいで頸動脈という言葉が浮かんで、どこかなあと思つて。

まさに、自殺しようと思つた時、今まで自分を愛してくれた人々のことを思い出した。まず浮かんだのは親たちの顔であった。

ここをさすつとつた時に、親のことが浮かんできて。で、初めて

いかんと思った。親に苦勞をかけたよ。一〇何人家族でさあ。友達が一万円か一万五千元毎月送ってもらった時に、五千元送ってくれて。それも断ったよ、僕は。でも貧乏の中から本当に苦勞して、誰も親戚中行つたらん中でやつてくれて、受験で一週間東京にいる間、親父はタバコを断った。「俺、タバコをやめとるで、頑張つてこい」って。母親はお茶断ちをした。昔風だね。ほんとで本当に細々と息子のために心砕いてくれて頑張つて、それでもし僕がここを切つたらね。血がばーつと出て、地面に吸い込まれるでしょ。それと同じように、親の苦勞がその血のように地面に吸い込まれて、まったく無駄になると思った。そのイメージが浮かんできた。それで「絶対いかん」と思った。「絶対いかん」と思ったよ。

次に思い浮かんだのは、東京の生活で自分を支えてくれたH牧師や卒業論文や修士論文を手伝ってくれた人々であった。

この辺の感じだけだね。ここで死んでたまるかと思った。ほんとだね、もちろん、H牧師が心砕いてくださったこともね。で、N先輩が卒論、そして修士論文はGっていう同級生だけでも、宗教学会に行つた人だけでも、後で東大教授になった人だけでも、「T君、悩んでいるんだなあ。自分で書くこうと思つても書けない時ってわかる。俺が話を聞いてやるから、君、しゃべれ」って。「そしたら、俺がメモ取つて、なんとか形つけてやるから」ってね。G先輩と言つただけ、G君がまとめてくれた。修士論文。ほんとで、清書までして

くれた。で、とにかく修了はできたわけ。だから、そういうね、友人たち、それから先輩たちのことも同時に思われたね。で、そしてどうしたらいいか。死ぬにも死ねんという結論だ。生きるに生きれん。そうするとね、「どうしたらいいんだあー！」って思つた時にね。

そして、「決定的瞬間」が突然起こることになる。

もう亡くなった先生が、浮かんでくるんだね。畳二つの小さな教会だよ。で、小柄な先生に五〇〇回以上は説教を聞いているはずだけど、一〇年に。九年間か。一節が浮かんでくるね。ぴったりの。

「ひょっとしたら、皆さんの中に自分のことをつまらない存在、いてもいなくてもいい、どうでもいい存在と思つてらっしゃる方がいらつしゃいませんか。もしいらつしゃつたら、その方は大変な間違いをしてらっしゃる。なぜかと申しますと、それはあなたが自分の目でご自分を見てつまらないと思つてらっしゃるにすぎないのであつて、もっと大きな目、宇宙くらい広い目。宇宙をお創りになった神さまの目からご覧になると、あなたはなくてはならない大切な方でいらつしゃいます」と。

「なぜかと申しますと、神様は一人も無駄な方はお創りになりません。どの方にも、どの方にも、その方なくては果せられないご用向きを与えてお創りになったんです。ですから、もし、あなたが

いらっしやらないと、神様のお創りになった世界は、あなたの分だけ不完全ということになります。だから、あなたは、なくてはならない大切な方。ゆめ、考え違いをなさりませんように。」

それが浮かんできたの。で、それを聞いた時は、覚えておった記憶がないんだけど、その晩にぱっと浮かんできたよ。そうすると、「えー」って思ってたね。「神様が創ったんだ」と。で、僕は「それならちよつと神様に言うことある」と思ってたね。もう夜遅かったよ。一〇時過ぎとった。窓開けてね、夜空を見てね。当時畑の真ん中だったから。

で、「神様、あんたおるんですか」(大声) ってまず、聞いたよ。

これぐらいの声で。「わしも子どもの頃から二〇年以上教会ってところに通っているけれども、いくら考えても神様おるか、おらんかわかりません」って。「でも、もしおるなら、言うことあります」って言ったの。「あなた創ったそうですね。頼んだ覚えありません。あなた勝手に創った。創った以上責任取ってください。」(大声) これぐらゐい声が大きくなったね。「責任取れ」(大声) って。「頼んだ覚えがないぞ」って、だんだん乱暴な言葉になってね。「責任取ってくれ」(大声) って。

で、ふつと思つたよ。「あんた、創つておいて、ころつと忘れとるんとちゃうか。忘れとるなら、この際思い出して、与えたとかい役割、そいつを果せるように、道を開いてやってください。おるなら返事しろ」(大声) って。だんだん大きな声になってね。夜中なの下宿のおばさん飛んでこなかったんだわ。よー寝とつたんだわ。

返事ないから、机たたいてね。そういうところもやつぱり人間のね、システムだと思うよ。それから、返事ないからここに柱があつたから、「がんがんがん」って壊れるなら壊れてもいいって本当に思つたよ。でも、壊れんわな。

そしたら、今度は畳の上にひっくり返つて、子どもが駄々こねるみたいに、どつたんぱつたんやってね。「返事しろ」ってわめきちらしてね。

結局何時間かしたら、くたくたになつちまつてね。ほいで、柱にもたれた。さつき頭をぶつけた柱にもたれた。もうくたくただと思つたよ。

その時にまたふつと浮かんできたね。H牧師の「神様が創った」って。そしたら、こういう出来の悪い僕は、僕の責任じゃないんだな。創つた人の責任だな、よう考えたら。I君というのが浮かんできた。ものすごい優秀で、僕より一年遅れて(卒論を)出したけど、どれくらい優秀だね。僕の後特別研究生になった。で、彼は一〇〇点、僕三〇点と思つたよ。神田の出版社の息子でね。子どもの頃から本に囲まれて育つてるね。頭もいいしね。当時日比谷高校って言つたら、日本一だ。で、優秀だ。

で、それに比べると僕は百姓のせがれでね。我ながら頭はよくなくて、すぐかつかしたり、感情的になつて、コントロールできない自分。だけど、これは僕の責任じゃないし、I君の一〇〇点はI君の手柄でもない。それで、I君の手柄があるとすれば、その一〇〇の素質をどれだけ活かしているかということだ。仮に六〇しか活

かしてないかってことになる、怠慢だ。活かしきってない。そこ
にいくと僕は。分母三〇だから、三〇しかできないはずで、その三
〇をこれ以上できんってくらい活かしまくったら、文句あるかって
思ったら、その途端にどこから響き返したかわからんが、「文句な
し！」って大声で言われた気がした。

「文句なしだよ。そうであー！」「文句あつてたまるかー！」
って思ったら、わくわくしてきた。「こんななつてたまるか」っ
てね。「やりやあいんだろ。やりやあー！」って思ってたね。

これが僕の最初の立ち上がりだね。最初って言ったけど、決定的
だけどね。

絶望から歓喜の精神状態への変化。まさに、T先生にとっての「決
定的瞬間」が起こった。

健康が駄目になつていた。就職もできなかった。学問も諦めなけ
ればいけないと思つていた。実際、フツサルを読んでいたが読む
ことができなくなつていた。「頑張つてきたのに、これまでだ」と思
い、S先生に出遭つてしまったことを恨む気持ちも一瞬浮かんだ。

T先生によると、今考えると、そのような精神状態で難しいフツサ
ルなど読めないのは当然だとわかるが、その時は、読めないことに
絶望していた。

そして、「生きていけない、死ぬしかない」と思つていた。人の道
を踏み外した。二八歳になつて。ナイフを研いで手首をさすった
時、親に苦勞をかけたことを思い出した。貧乏の中で仕送りをして

くれた親のことを思つた。「親の苦勞が無駄になる」と思い、「絶対
にいかん」と思つた。そして同時に、下腹のところから「ここで死
んでたまるか」と声がするほどに感じた。

それに、修士論文を聞き取りまとめてくれたG先輩や友人のこと
などを思い出し、「どうしたらいいんだ」と思つていた。その時に、
H牧師から九年間、何度となく聞いていた言葉が聞こえてきた。

「ひよつとしたら、皆さんの中に自分のことをつまらない存在、
いてもいなくてもいい、どうでもいい存在と思つてらっしゃる方が
いらつしやいませんか。もしいらつしやったら、その方は大変な間
違ひをしてらっしゃる。なぜかと申しますと、それはあなたが自
分の目でご自分を見てつまらないと思つてらっしゃるにすぎないの
であつて、もっと大きな目、宇宙くらい広い目。宇宙をお創りになつ
た神さまの目からご覧になると、あなたはなくてはならない大切な
方でいらつしやいます。なぜかと申しますと、神様は一人も無駄な
方はお創りになりません。どの方にも、どの方にも、その方できなく
ては果せられないご用向きを与えてお創りになったんです。です
から、もし、あなたがいらつしやらないと、神様のお創りになった世
界は、あなたの分だけ不完全ということになります。だから、あな
たは、なくてはならない大切な方。ゆめ、考え違ひをなさりませ
んように。」この言葉こそ、T先生が教会に通い何度も聞いた言葉だ
つた。

畑の真ん中で、「神様、天使様、あなたは本当にいるのですか。も
しおるなら、私はあなたが創つたものだ。責任を取ってくれ。おる

なら」と返事がないので、机をたたき、柱に頭をぶつけ、畳に地団太踏んで、何時間も叫んでいた。H牧師の言葉を思い出し、「できの悪い存在」と思った。T先生の一年後輩で特別研究生だったI君は一〇〇点の男で、自分は三〇点の男だった。彼は日比谷高校出身の人物だったが、T先生は、自分のことを「百姓の子で、頭が悪い、感情的な人間だ」と思っていた。「母数が三〇ならそれ以上のことはできない」と叫んだら、「文句なし!!」という大声が聞こえてきた。錯覚でなく、本当に聞こえたと言え、T先生は言う。その声が聞こえてから、「やればいいんだ」と思い、わくわくしてきた。

その瞬間から人生が大きく変わったと言いうT先生の「決定的瞬間」の語りである。それまでは「力のない声」で弱々しく話していた。大学に用事があっても研究室によることもできなかった。二日後に、あるシスターから「いったいどうしたの」(What happened to you?)と聞かれたことがあるほど、だれにもわかるほど変化したT先生になっていた。

この「決定的瞬間」の「神の声」が聞こえたという感覚は実感であると言いうT先生。「文句なし!!」という言葉は自分が疲れ果てた結果感じた言葉にすぎないかもしれないが、「自分の外から」言われたという実感。この実感が「イエス・キリストに出会えた」という感覚であると、T先生はその後の体験も踏まえて説明する。

H牧師の遺志を継いで

人が大切な人を失った時、その喪失感を埋めるために、その死者の遺志を継ぐという形で、今の自分の人生に意味を与えることがある(やまだ 二〇〇七年)。T先生もH牧師が突然死んだことで、H牧師に申し訳ないと思い、H牧師の遺志を継ぎたいと思っていた。その時の心境を振り返って言う。

亡くなった時にね、こう思ったの。「僕の人生、ない」と思ったの。さすがに気がついたね。先生苦しめ抜いて、癌にして、「僕、先生殺しちゃった」と思ったの。だから、「ただじゃあ許されん」と思ったの。そして、「僕の人生、何にもない」と。ただ生きるの許されるとしたら、先生の志を継いでやることだと。

牧師をやる柄じゃない。ほんで、困ったと思ったよ。だけど、とにかくできる限りはしようと思って。よそから牧師さん連れてくることと、それから僕としても先生がやってたようなことを、曲がりなりにもまねして、困っている人を訪問して、相談に乗るとか、僕にできること、助けるとかやる。その前にこれが一番大切だ。そうそう。まだ先生が生きている間にね、先生の愛には応えたいんだ。愛はわかったよ。絶対の愛だってわかったよ。応えたいんだ。でもねえ、先生の願うような強い強烈な宗教にはならんわけ。

H牧師の生きている時に、先生の期待に応えられなかったことも、

心残りだった。そして、自分には宗教家に不可欠な「靈的体験」がないことにジレンマを感じていた。教会にあった本棚を見たら、信仰の偉人などに関する本が多くあった。その本の中には、「私は祈った時に、神からこういう声をいただいた、私は決心して立ち上がった」という神からの声を聞いた経験がさまざまな形で掲載されていた。H牧師が生きている時に、「先生、この間、こういう本読んどいたら、こういうこと書いてありました。どうやったら、そういう神様と出会えて、神様から直接声を聞く経験できるんでしょうか」と聞いたこともあった。H牧師は、「それは祈り続けること」と。「先生、僕、祈り続けているけど、声聞こえませんか」と言ったら、「神様って時々かくれんぼなさってね、姿は見えないけどね、いないわけじゃないですから」と答えてくれるだけだった。その「神の声」を「決定的瞬間」のあの晩に聞いたと実感を持ってから、T先生は元気がでた。そして、本気で信仰を求めたいと思った。

本当のキリスト教の信仰を求めて

T先生は、本当の信仰を求めたいと思っていた。既存の牧師さんが説くキリスト教はT先生にとってはまったく魅力がなかった。しかし、小さい頃から読み続け、H牧師と一緒に読んでいた聖書に対する尊敬はあった。

H牧師が亡くなってからね。どうにも牧師としても間に合わん

し、で、次に来た牧師も煮え切らんし、聖書読むとすばらしい、と深く思った。この聖書の書いてあることは嘘じゃないと思うって。だけでも、どうもキリスト教どこを見渡してもなつとらん。でも嘘とは思えんって。三〇〇〇年、イエスになってからも二〇〇〇年伝えられてきて、世界中で読まれている以上は、なんらかの真実があるはずだと思った。次来た牧師にね、「先生、僕、洗礼受けて何年になるけれども、ちっとも神様の喜ぶようなことしとらん。相変わらず罪深いことばかり考えたり、やったりしました。こうやって、クリスチャンの名にふさわしくないと思いました」と言うて、牧師が「人間生きてれば所詮、罪人です。でも、キリストが身代わりに十字架で死んでくれたから、それを信じたら死んだら天国に行きますから、心配いりません」って言ったから、「このやろう」と思ったね。ちっともわかつとらん。現実の生活変わらないような宗教ってナンセンスだと思ったよ。僕は、その時からはっきり決心した。現実の僕を現実に変えてくれるのが、本来のイエスの宗教だと思ったの。納得できん教会ばかり。この広い世界に一箇所ぐらいはそういうことやってるグループが、現実になつてるグループがあつておかしくないし、あるはずだと思った。だから、それを探して、そこで体験するのが僕の人生だと思った。もし探してなかったら、僕の人生は何か。世界中の聖書を破いて捨てることだって、絶対許さん。本当に思ったよ。それくらい本気だった。こんなインチきな宗教はないと思ったよ。

本物のキリスト教を信仰しているグループを探し求めていた時、W先生の「証」witnessを読んだ。「これだ」と思った。昭和三十六年四月のキリスト教新聞のウィークリーに講演会について載っていたので、行くつもりでいたが、取りやめになってしまった。

W先生の本には、実際に人生が変わったという証、Witnessとしての直訳だけど、証が載つとる。一〇〇ページぐらい。二〇〇ページかな。それを最初見た時は、そんなに感じなかったけども、元氣出てから「神の声」を聞いたという体験の後、「これだ」って思った。それでついでも胃潰瘍も治ると思った。それで、入りたいと思った。それが昭和三十六年の四月だ。キリスト教会の出している新聞に、ウィークリーだよ。W氏講演会、四月何日どこそこですって書いてある。行こうと思ったよ。楽しみにしとったら、その直前に取りやめになりましたって書いてあったから、「神様、肩透かしくわせよって、ひどいじゃないですかあ」と思ったよ。あんなに喜ばせといて。「これだ」って思わせといて。取りやめって何ですか。神様に文句言った。

そしたら、じっとしておれなくなつてね。で、その最初に見た雑誌の一番裏に東京支部みたいなのが二、三箇所書いてあつて。で、いろいろ書いてあつて。どうも本当の支部らしいのはこれだっていうのがあつて、思い切つて電話をかけた。で、「W先生のこの本を読んで、本当にすばらしいと思って、先生の本をもっと読みたいので、どこに置いてあるか、どこ行ったら買えるか教えていただきたい。

そして、お弟子さんがいらしたら、そのお弟子さんに会いたいし、お弟子さんの集まりをしてなさったら、出席したいんです」って聞いた。「はい。僕が弟子で、東京で、ここで集まりしています。毎週何曜日。で、先生の本も一応置いてあります」って言うから、「じゃあ、伺つていいですか」って。「はい。ぜひいらっしゃい」って。その日のうちに。そしたら迎えてくれてね。でね、まずびっくりしたのに、「お電話したTと申しますって、本当に先生の本に感激しまして」って言ったらね。ミルクかけた苺出してきて。それが感動でね。貧乏学生でしょ。苺なんて何年も食ったことない。なのにミルクまで砂糖までかけてるの、どういうことだと思ったよ。で、感動した。ずっと気持ちしゃべつたらね、僕と同じ年だったけどね。その人も二〇歳ごろまで、カリウスで寝たきりだったのが、祈られて、立ち上がって、歩き出しちゃって、ほんで他のカリウスの人も祈ったら、その人もまた歩き出したと書いてあつた。そして、「僕はその本人です」ってね。

支部にいた人の人生が現実に変つたという話を聞いて、T先生はこれこそ自分が求めているキリスト教であると思った。そして、その会の人の紹介で、静岡県のあるE市で行われる一泊のW先生の講演会に参加することにした。一六〇人が参加する合宿であつた。午後一〇時にW先生が現れて、「祈りを聞かれた人はいませんか」とたずねた。誰も返事をしないと、「それは頭で祈るからです」「感情的に祈っているからです」と批判し、「霊性」を引き出すための「雄叫び」

の祈りが必要であると説教した。その合宿での出来事をドキュメンタリーのように描写するT先生。

正午から始まって、「自分の病気が治されたとか希望を見つけた」とか、みんなものすごい勢いで大きな声で断言して、一六〇人集まったかな。で、その終わったあと、合間に賛美歌を繰り返し歌った。飽きるぐらい歌った。それでいよいよ一〇時くらいだ。その辺で、W先生がお立ちになってね、まずおっしゃったのは、

「皆さんにまず一つお尋ねしたいが、教会に何年も、長い人は一〇年も二〇年もお通いだったと思うが、その中で祈りが聞かれたってはっきり経験した人いらっしゃいますか」って。みんな手を挙げない。「なぜ、そんなに熱心に通われて、聖書も読まれて、祈りが聞かれないんでしょうか。それは、頭で祈るからです。頭。教会などに行きますと、永遠の御霊なるなんとかの神をもって形容詞をたくさん並べてます。形容詞をたくさん並べたら神様が聞いてくれると思ってるんでしょうか。これは頭で作った祈りです。じゃあ、もうちょっと感情込めて、神様って、半べそかいて祈ったら神様聞いてくれるでしょうか。これも天井より上に届きません」って言った。

「じゃあどうすればいいんですか」って。

「人間にはもう一つ深い心のレベルがあります。「霊性」って言いますってね。「霊性」って初めてお聞きでしょう。例えば、こうです。日本書紀を引用してね。なんとかっていう部族の宗教のなんとかっていう巫女とかがさめ族から襲撃を受けるって感じた時に、祈りの

言葉を言いました。「わが御霊よ。先祖の霊よ」と言ったね。「もしいまさば、即来たりて、我らを助けたまえと雄叫び」って言ったの。雄しく叫ぶと書いてね。で、したら不思議なことに助かった。「雄しく叫ぶ。これが祈りの原形です。危機に直面した時に、何者かに向かって叫ばずにいられない。しかも、腹の底から命の全てをかけて叫び求めずにはいられない。これが霊性、霊から来る湧き出る祈りです。腹の底から命がけで叫び求める。これが本当の祈りです。」

「腹の底から叫ぶ、命がけで叫ぶ」祈りを体験するための儀式がW先生の指導の下行われた。T先生もW先生の教えをただ音読し、言葉はどうでもよくて、命がけで祈った。ただ祈り続けていたら、無意識のうちに「自動運動」を続けていた。そして、しばらくすると安らかな雰囲気になった。そして、実感として、足の前から抜けて行くような感じになり、「誰かがひざにいる」と感じた。キリストを感じた。「お前が生かされるように、十字架にかかった」と言った。T先生にとっては、下宿で叫んだ夜以来の「霊的体験」であった。その時の感動をT先生は語る。

(W先生が)「言葉はどうでもいい。神様、助けてくれ。キリストでも何でもいい。とにかくこの生きる神に出会わずには、この山下りないぞっていう決意で今夜限りに命をかけて求めよ」って言ったの。そしたら、やっぱり場の雰囲気だ。ものすごいことになった。そして、僕は「キリストの神様」って言ったから言わんかのうちに、

「らららららら」ってなっちゃった。で、こういう発音だよ。「らららら」って。巻き舌の。なんだこれはと思っただけでも、こうしとった手が、こうなっちゃうのね。自動運動だ。とにかく初めての経験。みんなやつとる。僕だけ一番派手だったらしい。畳でひっくり返って、上向いてどたんばたんばたんやってね。ほいで、くたびれちゃうでしょ。で、息ついてるとね、先生が来てね。「もつと一生懸命祈れ」ってね、ここに足をぼーんと。反発するじゃん。ほいで、しばらくしたらふつと雰囲気が変わっちゃった。安らかな雰囲気になっただけ。ほんで、実感よ。誰かの膝小僧にいる。抱っこされてる。ほんで、誰だろうと思っただけ、「キリスト」って感じがするわけよ。で、なんかおっしゃってるのね。と思っただけ、「お前が生きられるように私は十字架で死んだ。」それは言葉としては知ってるよ。でも、なんかしゃべられてる。こうした足の先からすーつというんなものが出て行くような気がした。すーつと。そしたら、「おらー」って激しく言っただけに、「あああ、ううう」って赤ん坊みたい。それでやつとたらね、ふつと気づいたらみんな静かになっただけになっただけ。僕だけこう。で、やつと気がついて、起きて見渡したら、みんなニコニコして、見てる。

なんだろうと思っただけ、W先生が「君、名前なんて言いますか」って。「Tと申します。」と。「君は今すばらしい経験をしたんだ。パウロがキリストに出会ったように、パウロは目が見えなくなっただけでもそれから生き返った。生まれ変わった。で、今どんな気分ですか」って言うから、「今の僕と昨日までの僕と連絡がつかない感じ

です」って言った。あとで僕呼んでね。「君はこれから新しい日々が始まる。君は今まで滝の下にいて、水が落ちてくるのを見ていたけれども、これから背が伸びて向こうから何が流れてくるかが見えるんだ」って言ったの。それだけ言われたの。で、とにかくそれはそれで帰って、みんながうれしいとかなんとか言っただけ。僕はきょとんと、ぼーつとして、何があつたかさっぱりわからん。ほいで、ただなんかが起こったってことと今までと違うっていう感じね。

合宿についての祈りの儀式で行われる、賛美歌を繰り返し歌ったりすることは、宗教団体でよく使われている「心理操作」であつたと今の視点から分析するT先生であるが、T先生は、一般的に言われている「霊的体験」の二回目を経験した。しかし、本人としては何が起こったかわからず、「きょとんと、ぼーつ」としてただけだった。しかし、同じような体験を日常的な祈りの中でもたびたび経験するようになった。

東京に帰って、今度は二つのグループに出た。Uという先生のグループとね、東京に二つも三つもあつたね。とりあえず二つ出た。そしたら、最初のIさんとUさんここに出て。もう祈りに入るために声を張り上げとつたらね。U先生のところに警官が来てね、「やめてくれ」って。葉書くんなん。近所から迷惑って葉書がくんなん。U先生が、T君の声が大きかったって。でね、それでIさんのところに行つたある晩ね。祈りに入つた途端にね、今まで「うろろ

ろ」って言ってたのがね、しばらくとまっとったのがね、その晩、複雑な異言いげんを語った。いろんなことを言ってるって。それとまらなくなつて、終わつて、じゃあ皆さん、さようならつて握手するとね、「あらとんとんとん」つてやってるわけよ。それでとまらないんだ。近くの電車の駅までそれやる。電車に乗ってからみつともないと思つて、窓の方を向いてやる。それからね、ある時ねえ、下宿で洗濯しとつて、物洗つとつた時に。「ねえ、神様」つて言つたら、「どすんと、目の前にいる」つて感じ。不思議でしょ。「本当に神様いる」つて感じでね。それから「神様」つて思うと、なんか不思議な気分になつてね。「これから僕つてどうなるんですか」つて言つたらね、かの字が終わる前にね。「すばらしいことになる」つてばあーんと聞こえるんじゃないんだよ、意味として伝わってくる。

このように日常的に起こることに疑問を持ったT先生は、Uさんに尋ねてみると、「それは神の声」だと説明された。それでも「へえー」と思っただけだった。しかし、その後もグループの集まりで講演するたびに「霊的体験」をすることになった。

七月に九州のA市で大会があつて、「行こう、行こう」つて。「僕、どうしよっか」と思ったけども、みんなが言うから有り金はたいて行っちゃった。K市の先生の自宅の集会にまず行つたら、七〇人集まつて、そこで「東京からいらしたTさんにお話を」つて言つたから、「えー」つと思つたけども、出てつて「東京から来ましたTと

申します」つて言つたら、離れたところに先生が腰掛けとつてね。

「T君、声が小さい。聞こえんぞ」つて。「えー、東京から来ました」つて言つた途端にね、すごいべらべらべらべらしゃべり出してね。楽しいのなんのつて。で、僕はあれ以来不思議なことで、毎日祈ろうと思つて、「神様」つて言うのと、こうやって合わせとつた手がこんななつちやつて、もう子どもみたいにうれしくて、自分の魂つてこんなに天真爛漫だつたんかつて初めて気がつきました、つてね。そしたら、みんな喜んでね。それまでみんな難しい話しとつたのに、急に明るくなつてね。ほいで、W先生から「今日はT君、君の話おもしろかつたぞ」つて、昼飯長崎ちゃんぽんラーメン食べてね。

次の日に、A市で一二〇〇人の聴衆に向かつて、話す機会が与えられた。その時は、それまでとは違つて、聖書の言葉などを引用しながら、「靈感状態」で話す体験をすることになった。

三日目にA市に行つて、今度一二〇〇人クラス。そしたら、また指名されてね。で、「僕が」つて思つたけれども、出てつてね、こうしとつた。そしたら、手がこうやつて揺れるの。これは自然現象だけれども、W先生緊張していると思つて、後ろに来て、「T君緊張しなくていい」つて手を置いてね。「大丈夫。しゃべれる」と。何しゃべつていいかわからんので、「何しゃべればいいですか」つて言つたら、「最近君に起こったこと言えばいい」つて。壇に立つてね。マイクがピーピーハウリング起こしてね。畳敷きだから広くはないけど

ね。みんな座って聞いている。で、「ちょっとマイクとめてください」とか言っちゃった。

で、「東京から来ました」って言い出した途端にね、自分でもわからんくらいにねえ、すごい勢いでしゃべるわけ。そして、言葉がここでこう考えて、こういくでしょ。そうじゃない。背筋の後ろから自動的に湧き上がってきてね。びっくりしてるの、僕の頭の方は。

普段の僕はこの辺にいてね。「なんだこれ」ってあつけにとられて見てるけど、ここから腹の底から腹式呼吸でもすごく力強く身振りでーんとするわけよ。そしたら、だらけきつとった会場がしーんとしてね。ほいでもうどこで覚えたか聖書の言葉からこんなうまい表現浮かんでくる、何だろうと思うようなうまい表現が出てきてね。我ながらあまりにも冴えてるんで、びっくりしたけども。終わった途端に割れるような拍手。ほんで、「普段のあんたと全然違つとった」って言った人も。

で、W先生やってきて、「T君、今何話したか覚えてるか」って言うから、「えー、何しゃべったでしょう」って言ったらね。「覚えてない方が当然だ。君は『霊感状態』だった。神の霊が君を用いてしゃべった。」「それがそういうことか」と思った。それで、それからというもののねえ、そのグループの集まりに行つて座つてもね、長々と話が續くとね、外へ出たくなっちゃうのね。何するかつていうと、外出てね、神様とだけしゃべってる。一対一で「神様」って言った途端、気が楽になる。頭で言葉を選んどるとねえまどろこしいけれども、異言で祈るとね、自分の率直な気持ちが表現できたつていう

気持ちがして、そして、いつも響いてくるの。

このような「霊的体験」を経験していくに従つて、T先生の人生にも具体的な変化が起こる。「神様とともにいる」、「ど〜んという」と感じながら、明るく励ます「神の声」が聞こえる。

結婚してW先生の下で宗教活動

そのような体験をした翌月の八月、故郷のI市に戻ったT先生は以前の自分とは違っていた。いつも結婚できない自分を氣遣つてくれている叔母に対して、劣等感を持ち、結婚できない人間として屈辱を感じていたが、この夏は違っていた。

ちよつと前に戻るけれども、二五から七、その時はもう二八になつちゃうけど、八になつてからも田舎Gだけれども、叔母がかわいがつてくれるんで、とにかく挨拶に行くことにしとつたら、「お前、いくつになつた。」「二八だ。」「どうやって暮らしとる」って。で、「明治学院大学の非常勤で授業しとる」と。「いくらになる」って。「一回八〇〇円で月に四回だと三二〇〇円で、税金の一割引きで二八〇〇いくら。」

「そんなん、食べていけへんがね」って。「だから、家庭教師やつてる。」で、「いくらになるの。」「一件三〇〇〇円で四件やつて。」「全部でいくら。」「一万五千円弱。一万四八五〇円。」「あかん」って

言うの。

「お前、東大まで出て、大学院まで出て、二八にもなつてたつた一万五千元。あかん。裏の八百屋の息子さん、お前より三つも年下だぞ。ほいで、こないだ中央大学つてとこ出なさつて、ほんで月給もうはや三万円。お前の倍もらつてござつせる。こないだえーとこから嫁さんもらわしてなあー。かわいい人だぞ」つて。「そこにいくとお前、二八にもなつて、嫁さんの来てもあらへん。」行く度にやられたよ。

八月の十四日ぐらいだったと思う。また行つたら、同じ説教くらつた。ところがね、今度僕の反応が違うの。「あかん。嫁の来てもあらへん。たつた一万五千元」つて言つた時に、「叔母さん、今なんて言つた。」嫁さんの来てもあらへんつて言つたがね。「そんなに言おうと思つたわけじゃないけど、わーつて出てきたよ。」そんなこと言うなら、今度来る時連れてくるだで、見とれよ」つて大きな声で。なんであんな言葉が湧いてきたかね。つまり、今までは言われるとへこんどつた。けど言われたら、跳ね返すようなものが言葉なんだけだぎつとる。僕は後でイメージしたのは、地球でマグマが沸騰しとつて、噴き出るつていう感じ。わーつと出てきたの。「今度来る時連れてくる」つて、「連れてくるから見とつてちよー」つて言つちやつたけれども、当てはあらへんよ。付き合つとる娘おらへんし。だけと思わず言つちやつたわけ。で、それが十四日ぐらいだったと思う。

叔母とのこのようなやり取りがあつた後の八月の下旬、W先生から連絡があつた。そこで、T先生は、W先生の弟子になり、先生の紹介の女性と突然、結婚式を挙げることになった。

八月の下旬だった。正確に覚えてないけどね。二〇何日だった。W先生、普段K市にいる人が、東京に出てきた。電報で「新橋第一ホテルでお待ちする。おいで乞う。」尊敬し抜いている先生だから、飛んでつたら、なんかすごいレストランでご馳走してくれた。でね、いっぱい物を食べさせてくれた。「先生、今日は何のご用だったんですか」「君と友達になりたかつた。君の事をよく知リたかつた。君と友達になりたかつた」つて言うから、何のことかよくわからなかつた。「へえー」と思つてね。その日はそれで帰つた。

そしたら、九月に入つてね。これはもう七日だったと思う。また電報で、「新橋第一ホテルでお待ちしております。」行つたら、また前にもましてご馳走で。ほんでそれでねえ、「先生、今日もご馳走していただいて、なんかご用でしょう」つて言つたらね、「実は君に頼みがある」つて言う。そしたら、「わしのところに弟子にしてくれと頼んでくる青年は全国から断りきれないくらい来るのだが。わしの方から弟子になつてくれつて頼んだのは、T君、君が初めてだ。どうだ。なつてくれないか」つて。それでびつくりしたね。まずまだ、東大引きずつてるからね。学問諦めるでしょ。嫁さんも来てもあらへんでしょ。で、「こんな僕でいいんですか」つて言つたら、「君は珍しい素質」つて言つたかな。「ロゴスとバトス両方備えている。

ロゴスというのは、論理的に考え抜く力。パトスは熱情。人の魂をゆさぶるもの。熱いもの。どちらかだけ持っている人間は少なくはないが、両方持つてゐる人間はめずらしい。君はそれだと。わしは育てたい。聖書、学ばんか」と。「わしのように伝道しないか」って。

「このキリストの神の力をみんなに伝えるこういう商売に入る気はないか。」「最近弟子に入つて三年目の弟子たち、三年目なのにもうキリストのような働きをしてる」と。で、「いろんな病氣の人を治してあげたり、石の上にも三年。五年経ったら一人前。わしは君を育てたい」と言つた。これうれしいね。あまりにもの差だ。東大（の時）のね、生き方とね。で、「お願いします」って言つたら、「ありがとう」と。「ところでついであつてはなんだが」って先生確か言つたと思う。「結婚しないか。」「えー！」「誰かつきあつてゐる娘さんおるか。」「いません。でも駄目です。僕、収入月収一万五千円ですから、嫁さんの来てありません。」叔母さんの言葉が焼きついて、条件反射みたいに出てきた。そしたら、大きな声で言いなすつたよ。Wつていう先生、視力とか眼力強いね。こうなつて、「おらー！」「って。君はどうして自分で自分を辱める言葉を、そうやって平気で吐き出す。こらー！」「って言うからびつくりしたよ。その表現にまたびつくりしたよ。「自分で自分を辱める言葉、僕言いましたか。」「言つたでしょ。嫁さんの来てがないなど」と。「君は立派な人物だ。いや、人物よりも神様は全ての人が幸せな家庭生活を営めるようにお創りである。だから、わしに任せないか。いい娘さんを紹介する」って。で、「駄目だつて思つてもね、やつぱりこの

辺よ。この辺で、もし万が一この広い世界に一人ぐらい物好きな娘がいて、来てくれるつて言つたら、誰でもいい」と思つたよ。「大事にする」と思つたよ。このくらいの可能性は否定できない気持ちであつたから、「お願いします」って言つちやつた。そしたら「ありがとう」って言つてくれた。それで話はおしまいで。

それは七日で、木曜日で一〇日、日曜日だつたと思う。また電報で「おいで乞う」で、すつ飛んでつたら、ロビーで、「確認させてもらう。本当に私の弟子になつてくれるか。」「お願いします。」「ありがとう。」「本当に結婚わしに任せてくれるか。」「今度は紹介が任せるになつちやつた。でも、同じだわな。ほいで「お願いします」って言つたら、当時ピンク電話があつた。そしたら何十分かして飛んで来た。今でも覚えてる。髪をひつつめて、ここで束ねてたらして、ピンク色のブラウスで。紺サージのタイトスカートで、息切つてきた。「この娘さんだが、文句あるか」って。いきなり。僕は顔は知つてたよ。U先生のところに来てて。でも、全然けたが違ふ感じで、いいところお嬢様で僕とは関係ないつて。その人がいいわけで、文句なんてあるわけないし、ぐだぐだ言う必要もないし。「ございません」って言つたら、「よーし。」で、「この青年だが文句あるか」つておつちやつたから、おありかと思つたら、「ございません」つて。で、気が早い人でね。「ありがとう。今夜はめでたい。めでたい。婚約成立」って。もうめちやくちやつくりしたよ。先生、イスラエル旅行に行く準備に外務省で手続きに来とつたのね。で、「三ヶ月行つて来る」って言うんで、じゃあ三ヶ月行つて帰つてきたら結

婚式ということで、K市に行つて、仕事つてことで。弟子になるつてことで。三ヶ月付き合う間にお互いのことを知り合えるだろうと思つたら、金曜日に出発する。木曜日は忙しい。水曜日もいろいろ用事がある。「明後日火曜日にしなさい。」「えー。」「火曜日結婚式つて」言つたよ。でね、どうなるかと思つた。「場所はわしの泊まつておるホテルの地下室借りる」で。ホテルから金屏風借りて、テーブル並べて即席だ。「先生、親に。急だから親に連絡どうしましゅう」つて言つたら、「親、この際ご無礼する。」「どうしてですか」つて言つたら、「親に言つたらまとまる話が壊れる。」「何のことかわからなくて、後でわかつたけどね。家柄が違いすぎたから。」

このように、T先生は新しい職を得て結婚もできた。仕事としては、七〇人くらいの宗教的な塾で、ニューズレターの編集をした。主な仕事は、W先生の講義の書き起こしを週三回やって、原稿用紙四〇〇字の二五枚のものをA四判四〇ページほどの雑誌に毎月発行することだった。最初の頃は、「こんなもの使い物にならん。リズムがない」とよく言われた。リズムがないと言われても当時は、T先生にはその意味がよくつかめなかった。半年たったところからは、W先生の右腕 (better-half) であると言われるほどに信頼されるようになった。W先生が二回の講義、三回目の講義はT先生が行つた。土曜日は伝道で三時ごろに出かけて、午前一時ごろアパートに帰宅し、午前三時ごろに寝て、八時から出勤ということもよくあった。

W先生のところを飛び出して

先生がイスラエルに行つた後、T先生たちも憧れていたイスラエルに行くように言われた。当時はイスラエルに行くビザを取るのとは不可能のようだったけれど、いろいろなネットワークを使い、「オリエント学会」の会員として中近東に学会派遣ということで可能になった。イスラエルでは若い四人で、三〇歳代のリーダー格の人がいろいろ説明してくれた。キブツはインフォーマルなグループで、午前中の八時から十二時まで、午後は二時から五時と人々が自由に楽しく働いていた。そこでフリーダという、マルティン・ブーバーの通訳をやった人にも会つた。そこでも日本で言われていたように、「お前は人を褒めすぎる。お前は、他の者よりはるかに優れている。自分自身を見直しなさい」と言われた。イスラエル滞在中、死海を歩き、砂漠を長い間歩いた。イスラエルにヨルダンから入る時も、いろいろな交渉で可能になった。休戦ラインでの兵士たちの「死を覚悟している顔」を見るなど、イスラエルでの貴重な経験を持つて帰国した。

イスラエルから帰国後、大阪に移住した。W先生の下で、三時間しか寝ない編集の作業が続いていた。雑誌の編集、販売と毎週忙しい日々で、毎週一〇〇ページ以上のものを編集し、雑誌として出版していた。そこで、大問題が起こった。W先生が雑誌に掲載する写真を捏造させた。奇跡が起こっていないのに、起こったかのように編集するようにと指示をしていた。「祈つたら治る」と以前は言つて、

神に祈りをささげ、実際に治った。しかし、この頃になると、「俺が祈ったから治った」と言い始め、治ってなくても、あたかも治ったかのような話を作り始めた。

先生がおかしくなってきたのね。「病氣治った」って言うでしょ。

いんちきやるわけ。細工を。写真ねえ、ここに黒いあざがあるっていう生徒が来て。祈ってもらったら消えると思って。でね、来て。一生懸命やってたわけ。ある時先生祈って、「ほら前より薄くなったぞ」って言うわけ。僕の目には全然薄くなってないわけ。でね、

「これ写真できれいにしろ」って言うの。「治った」って。僕がまだ補佐係だった時に前任の編集長だったMっていう人が、写真をフェイク（捏造）したわけ。これがねえ、僕はショックだった。なんでこんなことやるかって。ただ東京で世話になった若いUというW先生が一番弟子の人が僕かわいがってくれた人が、「T君、このフェイクについて、この際はつきり言っとく」って。「W先生は君の頭の理解を超えたことをする」と。「霊的な世界のことを君はまだ初めてだろ。先生は何十年もの経験者だ」と。「君の哲学的頭では納得できない不公平なことをされる。ただそれは少なくとも三年間は批判しないで、ひたすら学び続けてくれ」と言われたんで。こないんちきで人を信じさせても、これは本当の信仰になるかどうかね。疑問だ。それがまず第一。

もう一つは、W氏自身が、「自分が祈ったら治る」っていう言い方をした。自分の手柄にしちゃった。正式の講義では逆のことを言う

んだ。だが雑談の時に、「俺が祈ったら一発で治った」とかね。事実、治ってるんだよ。だけでも、昔はそうだったんだけど、僕が弟子になってから、先生、全然できないんだ。全然治らない。で、治ってたって話を作るの。

また、H市のホテルAで三五〇〇人の年次大会を開いた時に、当日になって、W先生は、ホテル側に「値引き」をさせた。さらに、その頃には、少しでも批判をすると、よく怒った。取り巻きの弟子たちが変になってきた。伝道が伸びないということも問題になっていた。W先生自身が「みんなは、俺の顔をみてやっている」と言っていた。グループ全体がリーダーを絶対視していた。そこで、T先生たちは、W先生に田舎に隠居してもらう計画を立てていた。その時、W先生は、三〇〇名会員を持つ大阪本部から一〇〇〇名の会員を持つ東京本部に移ると言って、移って行った。二つの場所の間では、人数が違うだけに収入が違っていた。U先生が東京でW先生のことを批判していると聞き、W先生は「裏切った」と言っていた。

U先生は大阪に説明に来た時に、自分の言い分が理解してもらえないければ、辞めるつもりだと言っていた。W先生の子飼いの弟子、K弟子が商売みたいなことをやっていた。信者、多くは学生を寮のような家に住ませ、売り上げを褒めて商売をしていた。まさに、利益目的の新興宗教と変わらない状態だった。

僕は、先生焼きが回ったと思ったね。Kっていう人は口がうまい

わけ。で、いんちき商売だからね。でね、昔、車なかなかエンジンかからん時に、エンジンスタートを早めるログだつて売りまくつとつて。みんなW先生がかわいがっている人だからと思つて、信頼するの。で、みんなそれに騙されとるわけでしょ。これはもうK新興宗教と変わらんわ。物を売る商売。先生、それに騙された。それから、前の奥さんは立派な人だったけど、亡くなって。結核で。で、しばらくして弟子の中の一人の先輩が、先生と恋愛しちゃったわけ。ある会社の社長の奥さんになったけれども、道楽のご主人で性病を移されて大変なことになったのを、先生のここに来て、折つてもらつてきれいに治っちゃった。で、離婚して弟子になって来とつて、先生の奥さんが亡くなって。で、先生が若くてべっぴんとかなんとか思つたんでしょ。その女性にも入れあげちゃつて、結婚つてことになつて。

五年間仕えていて初めて「先生は間違っている」と言つた。その時は、「首になつてもよい」と思つていた。一〇日間の謹慎ということだったが、実際に編集作業をする人もいなかったたので、その謹慎も解除された。U先生はすでに破門になつていた。U先生は、T先生に「死んだつもりでやつてくれ」と言つたけれど、大阪の街を歩いて、W先生のところを出る決心をした。

八月のある日に先生が来て、なんか言つたから、「先生、それは間違つておられます」つて言つたの。怒り出してねえ。「きさま」つて、

「五年間俺に口答えしたことなかった。今日初めてした。なんかわけがあるだろう」と。こっちはその前にくびになる覚悟をしてね。「くびになつてもいい」と思つたよ。その時にねえ、だから、先生くびだつて言うかと思つたら、「謹慎一〇日」つて言つたの。「へえー」と思つた。こっちは、毎晩三時間しか寝ないのにさ。謹慎一〇日つて言つたら、仕事やらんでもいいから一〇日間寝れるわと思つてね。で、ニコニコしとつた。「お前、俺が本気で怒つてるのがわからんか」つて怒つて、向こう行っちゃつた。で、家内呼んでね。ほそぼそつと。「わしが本気で怒つとるのにTはわかつたらん後でよく言つておけ」つてね。結局一〇日謹慎つていうのもねえ、グループの動き全部ストップするからね。僕ストップしたら。その日のうちに解除。すぐ仕事が回つてきた。だけれども、いつでもやめようと思つたよ。で、はつきりともう壊れるなら壊れる。くびならくび。

U氏が空港に着いた時に会つて。そこで二人だけで話し合つて、出てきた時にU氏がこうして泣いとつたんだけど、「T君、僕は辛い。僕は先生に破門だと言われた」つて言うわけ。「T君は残れ」つて言つた。「こつ言っちゃあなんだけど、君は先生の右腕、俺は左腕。両方いなくなつたらいくら先生でもかわいそうだ」と。「君だけでも残つてくれ」つて言つたのね。「死んだ氣になつてやつてくれ」つて言つたのね。で、僕はそれを信じてやつたよ。で、残ろうと思つて、次の日、事務所の屋上に上がつて空を見たら、青空がねえ、黒く見えたの。本当に死にそんな氣になつた。その夜中に、どうにも

気持ちが納得できなかったので、大阪の街を歩いたわけ。「ちょっと散歩に行ってくる」って。で、「もし僕がこのグルーブを脱出するとしたら、どうだろう」と思った時に、足がびよんぴよこ躍り出した。「これは魂が知ってるっていう証拠だ」と思ったよ。ほいで、もう決めた。で、戻ってきて家内に「このグルーブ出る」って。で、「君、付いて来てくれるかどうか。付いてくるからにはもう月給ないから、子ども二人当分塩水を啜って暮らすことになるかもしれない」って言ったら、「あなたの気持ちが、今度初めてわかりました」って。で、「覚悟はできてます。」そいで、すぐその晩のうちかな。弟にB市に電話して。で、夜中来てくれて。僕たちは次の日に新幹線に出て。B市にね。親のところね。

W先生と衝突しようとしていた時に、いろいろな「奇跡」がT先生の周りで立て続けに起こっていた。それをW先生が見ていて、「Tのやつこの頃、『奇跡力』が身についてきた」って言ったということ聞いていた。T先生自身は「奇跡力」が身に付いたとは思っていなかった。しかし、そのような奇跡的なことをT先生が経験した。そのように「霊力」が強くなっていた時に、W先生のところを飛び出す決意をした。それを長年世話になっていたU先生が心配してくれたが、結局、W先生のところから飛び出した。

そういう中で、その突発事件で僕、飛び出したわけ。で、U先生は、「T君、一人で飛び出してどうやって生きていくつもりだ」って。

「このグルーブの中で君は生きれる」って言ったよ。で、僕はとてもないと思った。U先生は、「Wグルーブの一万から裏切り者という焼印を押されて君、生きるのは大変だぞ。」ただ僕は「先生、日本人一億いますからね。九九九万は僕の味方です」って言っちゃったの。そいで、飛び出したでしょ。そしたら、W先生、結局びつくりして追っかけてきたよ。「わしが悪かった」って。「Uとわしの間に挟まれて、お前、苦しんだろう」って。で、「戻ってくれ」って。「お前、前から約束しとったアメリカに行かせるって言っとったが、行かせなかって悪かった」って。「ただ二週間だけ行ってくれ」って言ったから、「イエス」って言ったの。ところが、それを大阪のある人に言ったらね、「Tさん、W先生に騙されたぞ」って。「先生の手だ」って。そいで「Tさんに賛成したグルーブと若い子達はどうなると思うか」って。「Tさんがまた裏切り」ってことになる。僕は損だと思ってね、改めて電話入れて断った。そしたら、それからというもの大変だね。名古屋にW先生が来たって大会に。みんな集まってくるでしょ。三〇〇人くらい集まってくるからね。二時間、始めから終わりまでTの批判。「悪魔だ。サタンだ。二時間。いやあ、裏切り者。神経失らせて生きろ」って。警戒してるの。先生はおびえたの。僕は何にもしなかったよ。

それから、数年して、W先生は亡くなった。亡くなる直前に言っていたということを人伝えに聞いた話。

(W先生は)結局、肝硬変で亡くなった。その時にねえ、亡くなる前にねえ、側にいたナースの人にねえ、僕の仲間なんだけど。T君にはすまんことをした」亡くなる三日前に。それを聞いたナースが別の人に言つて、その人がいろんなルートで僕のところへ伝えてきた。で、先生はわかったわけだ。結局僕たちが飛び出てからね、KとVって二人の男性ね。ばれちゃった。いんちき商売。ほいで、先生怒り狂った。で、一人Vって人はいなくなっちゃった。Kっていう人はしばらくひっこんでから、皆の前でわびたそうです。で、その後、先生が結局T、Uが正しかったってわかったんですよ。で、「T君にはすまんことしたな」って。また先生の死に方ひどかった。あらゆる医療を拒否した。ものすごく苦しかったらしいけど。叫び声あげながら、頑として鎮痛薬を受け付けなかった。最後一声「うおー」ってうめいてからね。

T先生の周りで起こったさまざまな「奇跡」

その五年目の年には、T先生の周りで、一般的な視点から考えれば、信じがたいことが起こったと言う。それぞれについて、T先生の語りで再現する。まず、肺がんの三〇歳の男性がT先生たちの祈りで治ったという話。

ある日、三〇歳になる男性が飛び込んできて。事務所に。グルーブの。で、「助けてくんはなれ」って大阪弁で。「どうしました」っ

て言ったら、「わし肺がんだ。あと何ヶ月の命だ」って。「わし今日病院抜け出してくる時に、一歳半の長男がかわいい手を振った」って。で、「この子を残して死ねん」って言うからね。「祈ってくれたら治る」ってことでしょ。W先生おらへんでね。で、僕は自分の集会で祈ることにした。それが火曜日でちょうどその夜集会だから、みんなのいる場で祈ろうと思った。で、「今日、夜来れますか」って言ったら、「病院の外出許可が三時までだから」って言うから、「じゃあ来週末来てください。」帰ってきて、その集会十四人ぐらいかな。六畳間に座って若い人に聖書の話をして。「皆さん、今日、こういう方がいらつしやいました」と説明してね。で、「どう思われますか」って聞いたの。「かわいそう」って皆が。「じゃあ、僕たちの神様はこの人を癒す力があると信じますか」って言ったら、「信じます」って言ったわけ。「じゃあ、みんなで祈ってください」って一時間祈った。

次の週、約束どおり来た、本人が。「この方が皆さん祈ってくくださったCさんです」って言ったら、拍手した。で、初めて拍手して迎えられたわけだ。彼としては。うれしかったと思う。で、いつもどおり僕は聖書の話をして、いつもどおり皆さんのために祈る。手を置いてね。その人の番に来た時に、こうやって祈つとるんだけれども、こう、苦しげな顔をして祈つとるんで、僕はこういう時はちょっと難しいと思った。肺結核の人を祈る時に、W先生、開けてワイシャツもはだけて、直に手を置いて祈ったって聞いていたのを思い出して。戻ってきて、「ちょっと失礼します」ってここを開けて、

手を当ててほんの二言三言だけでも、「神様、祝福してあげてください」って言ったら、「ばたーん！」と前に倒れちゃったの。で、これはもう慣れてる、僕、こういう現象は。で、ちよつと顔見たら、ニコニコ顔なわけ。これは心理学的にも説明できるかもしれないけれども、一種の催眠状態らしいよ。でもとにかく「やった」と思った。で、次の日検査日だつて。で、レントゲンで調べたら、これくらいあった肺がんと言われてたやつが、これくらいになっちゃつたって聞いた。で、一晩だよ。だから、ドクターたちはびっくりして、「なんだこれは」って。結局、結論は「誤診でした」って。肺がんじゃないかった。別の病名。「サルコイドーシス」でね。症状似てるんだ」って。結局、治っちゃったわけ。

次のケースは、不安症に悩む中年女性の場合であつた。不安症で心臓発作を起こしていた女性。

大阪の北の方の服部に行った時に、初めての中年の女性がいらして。その招いたグループの世話人の奥さんが、「T先生、今日、この方が初めてです。よろしく」って。この方ねえ、いろんな悩みをお持ちです。「不安神経症」って言って、「心臓発作を起こす」と。「気質的には問題はないのに不安になってくると心臓発作が起きるんで、ここ何年悩んでらっしゃいます」と。で、お話してから「はあー」って思つてね。「不安かあ。じゃあ安心すればいいんだな」と思つて。「本当に、神様ねえ、全ての人を愛しますよ。ちゃ

んと見守つてますよ」って話をして段々明るくなった。ほいで、いつの間にか、その人、異言で祈つてゐる。これは僕たちの解釈では、潜在意識の開放。キリスト教の言葉だと神の霊が注がれたと。これは「聖なる聖霊の洗礼」(baptism in holy spirits)。続々奇跡が起こつて治つてゐる現象だから、「やった」と思つたわけ。で、終わつて「よかつたですねえ」って。九時頃お稲荷さんこんなに出たの。で、「皆さん、いただきます」って。その人だけ、こうしてて。「あんたどうしたの」って。「私もう一つ病気があつて、胃潰瘍で夜食は禁じられてます。」「そう。さっきまで胃潰瘍だった。でも大丈夫。もう大丈夫よ。食べなさいよ」って言ったら、「いただこうかしら」って食つちやつた。結局、それ治っちゃつた。

でね、もつと不思議なのがねえ、その人が「先生不思議なことが起こる」って。それからねえもう一つは、「私みたいなのが祈つても神様聞いてくださるかしら」とか。「何が」って。「誰だつて一生懸命真心想込めたら聞いてくださるよ」って言ったら、「そうかしら」って言うから。「なんかあつたの」って。二七になる妹。妹が子宮筋腫で拳骨ぐらゐある。で、「手術しないかん」って言うんで、いよいよ手術の日が決められて。で、「妹がかわいそう」と思つて、手術の前の晩に「神様、妹の子宮筋腫なくしてください」って祈つたんだつて。手術の日に行つて、手術台に載つて切ろうとしたら、ないんだつてよ。お父さんと息子さんが調べてしつかりあつたのが、「今度手術しようとした日に二人で調べてもないから手術やめになった」つて言つた。でね、そういうことが起こるわけよ。で、これは不思議

でないで、その精神状況がどういう風に成り立つかが問題だよ。これテクニクかもしれないし、そうでもないとも言いたいし、いろんな要素があるけれどもとにかく一定の状況が整えば起こるわけ。

別の奇跡的なできごとにも触れる。暗い顔をして生きていた看護師さんが、T先生の祈りで明るく、「ピカピカ」の女性に変化したというエピソード。

それからもう一人、画期的なのはね、看護師さんでねえ、二三つて言ったかな。青い顔をしてね。友達のKいう人が、Nさんって人が連れてきて。「先生、このKさん助けてあげてください」って。「どうなさったの。」「自殺未遂何回繰り返したかわからん」って。青い顔して。で、「どうなされたの」って。友達が言うにはお母さんが精神病を発症なされて、大変おかしいんで、自分もそういう素質が受け継がれていると思ったら、もう元氣なうちに死にたいと思って、繰り返したけれども、その度に心配して、みかん箱いっぱい鎮静剤、安定剤、睡眠剤って飲んでも、全部効かなくて、ドクターに相談したら、「馬鹿は死ななきゃ治らないと言われました」って言うの。ひどいこと言うドクターだなんて。ほいで、聖書のある節を読んだね。目の見えない人がイエスを通りかかると聞いてね、「救いたまえ」って喚き立てたんだね。で、「やかましい、黙れ」って、民衆が抑えにかかったら、イエスが「わしを呼んどのんか」って「連れてきなさい」って。で、「お前喜べ先生が呼んどのんぞ」って言った

ら、「目が見えないのに走り出した」って。イエスの方に。そして、イエスの前に来て、「わしにどうしてほしいか」ってイエスが言ったんで、「私は見えるようになることです」って言ったら、「お前の信じるようになれ」って言ったら、見えるようになっちゃったところをやったの。

で、話した。それで、「今ねえ、イエス様があなたの目の前にいらっしゃるよ。どうなりたいか」って聞いてらっしゃる。「あなたはどうか答える」と。まだ泣いているから、「明るくなりたいってお答える」って。はい。「じゃあ、僕、代わりに言うからね、あなた本当に自分でそう思ってアーメンって言ってくださいよ。イエス様、あなたはもうなりたい」って。「はい。明るくなりたいです」って。僕が今度イエス様になって、「あなたの信じるようになれ」って言ったの。そしたら、わあって泣き出した。溜まっていたものが吹き出ちゃったの。ひとしきり泣いたら、顔まっかつかなの。で、「うれしい。うれしい」って言うからさ。こっちもびっくりしたよ。何が起こったかと思つて。それで、結局その日ねえ、喜んでねえ、初めて来たのにみんなの茶碗洗って帰っていったね。それからまもなく一人で来てね。「先生、報告です。うれしいです。病院に帰ったら、お前、何が起こったんだ。別人だ」って。「十八の娘に見える」って言われました。ピカピカで。「先生、私ねえー、小児科病棟で子どもの患者からなんて言われていたと思います。眼鏡ばあちゃん」って、言われとったのが、結局ねえ、その頃うちの娘さん三人と近くに若い男五人と全部で私たち入れて十二人の家族生活みたいなのをして。朝晩一緒

に飯食って。それを見て、「先生、奥様大変だから、私が手伝う」って、病院やめて住み込みに。

奇跡的な経験を次々語るT先生。外交員の娘に起こった「奇跡」。

もう一人はねえ、ある保険会社の外交員に頼まれて、こうして僕のところいらしてね。で、なんだこの人って思うくらいにねえ。僕を一生懸命聞いた。こうして聞いているからどうしてかなあと思ったら、ある晩電話かかってきて、「先生、娘が大変苦しんでおります。助けてやってください。」とりあえず、来れますか」って言ったら、タクシー飛ばしてやってきて娘さん連れてきて。僕三二、三歳だね。その人は二四歳だ。でね、「何苦しんでるか」って電話で聞いたらね。クリスチャンの家庭なんだね。で、普通の教会では不満足だって、「娘は罪深い。罪深いってものすごく苦しくて、もだえております」って言うから、誰がそんなこと教えたかと思ってる。青い顔してこうしてるよ。で、どうしようと思ってる、名前ゆりさんって言うから、はっと思ってる。ゆりの花、ゆりの花っていう賛美歌があるんでね。「春に合う白百合、夢路より目覚めて限りなき姿に。限りなき命にかな。咲き出づる姿よ。」有名な賛美歌を歌うね。ゆりこさんっておっしゃるの。「ゆりの花の歌を歌いましょう」ってね。僕、抱っこしちゃってね。赤ん坊みたいに。こうしてゆすってね。「ゆりの花は……」って何回ぐらいたったかな。何回も。だんだんだんだね、赤みが差してきてね。ニコニコして。「楽になっ

た」って言ったら、「はい」って。それっきりねえ元気になっちゃった。そのお母さんのねえキリスト教ならぬ、T教になっちゃったわけよ。とんでもないことだけど。

D 大学への就職

五年間仕えたW先生のところを飛び出て、故郷の弟の家で世話になっていたが、その地域にはW先生のグループが残っていたので、祖母の家があったI市に移った。僅かな退職金を受け取り、妻の内職で生活していた日々。失業中のT先生は、神を身近に感じながら、意気揚々と過ごしていたと言う。

ひたすら聖書読んで祈った。そうすとね、その頃、本当に神を身近に感じた。ちょっと椅子にこしかけて、「わー」と神を感じる。それでねえ、失業中だけでもねえものすごい意気盛んなわけ。失業中ってのは、下向いて歩くのが常だと思うけど、空向いて楽しみでいっぱいって感じでねえ。「神様、今度Tにどういう活動舞台を用意しておられますか」って。

故郷に戻ったT先生は、高校の時代から世話になっていたS先生にあいさつに行った。S先生は、T先生に大学で教えること勧めたが、最初、T先生は断った。しかし、もう一度考え直し、就職の世話をお願いしたら、たまたま空いていた英語の専任講師の職に就ける

ことになった。その採用が決まるまでのいきさつ、偶然と言えば偶然であるが、一つの「奇跡」に思えることである。

S先生のところにあいさつに行ったら、「また、T君、またやったか」って。「まあ、貧乏しとる時が一番勉強するぞ」って。二度目に行った時に、「遊んどつてもしょうがないD大学手伝え」っておっしゃった、非常勤で。「先生、僕は聖書一本でいきます」って言ったの。で、帰ってから「わっ」と思ったのは、「聖書一本で」って言うてるけども、もうそんな牧師づらしんでもいいし、人間として生きるっていうなら、何やったっていいんで。そうして、大学で非常勤ならば、毎週五〇〇人ぐらい、頑張れば接しられた。教養の哲学とかドイツ語ぐらいだったら楽しいし、哲学だったら人生論やつとれば専門と違うで、いいだろうと思つて。「これだあ」と思つてね。引き返してS先生に「こないだの話、先生、ありがたうお受けしたいです」って言った。法学部と薬学部とあちこちであたつたけども、もう二月だったんで非常勤講師の手当て済んどった。で、「T君、遅かったのー。君の返事はちょっと遅かったのー」って。そして、「おい、A学部に行こう」って。A行ったら、語学の主任教授がドイツ語の教授で、履歴書を見てたら、「君、僕の後輩だね。」東大出とるから。で、「指導教授、誰か」って言うから、「I先生です」って言ったら、「女房が同級生だ」って。「骨おつてやろう」って。で、「君、英語で書いた論文あるか」って。「ドイツ語は間に合つてる」と。「哲学も間に合つてる」と。「英語が急に二人専任がいなくなった。一

人は見つけたけど一人は探してる。英語やらんか」って。「僕、ドイツ哲学ですけど、英語いいんですか。」「英語ぐらい教えられるだろう」と。「英語で書いた論文あるか」って。「あります。」「英語から訳したのあるか」って。編集長やつとった時に、アメリカのいろんな宗教関係訳しとった。後日リスト書いて持つてつたら、「これだけあれば十分だ」って。また奇跡的な話だけれども、A学部は文系の教員が少ないんで、文系の教員の資格審査は商学部に頼む」と。で、商学部を作ったのS先生で、まだ在職中だった。長老教授で。で、委員会にかかった時に、もう一人競争が入ってたそうだけれども、S先生が推薦状でねえ、「T君の英語力はわしが保証する。高校時代から一緒に勉強してきたから保証する。T君は掘り出しものである」って。推薦状こう線引いて書いてある。そいで出したら結局、「S先生の言うことだから信用」ってことでしょ。で、決まっちゃった。「英語だぞ」って言うんで、英語六コマ。で、「哲学をやりたければ、サービスだ」って言うんでねえ、二コマやらせてくれた。そのうちにねえ、結局、非常勤いなくなつて四コマになつてね。サービスだけどね。

サービスで始めた哲学の講義であつたが、A市の時に感じた靈感が三回の講義に二回ぐらい起り、人気のある授業になった。授業の中で「不思議に言葉が湧いて」きた授業も多かった。

(授業やつて)ものすごい人気になったよ。A市でやった時に

ねえ、「靈感状態」になった。それが続くの。教壇に立つとねえ、不思議に言葉が湧いてきてね。でね、学生が答案に書いてくれた。「先生の授業不思議です。なんで学生しゃべらないんですか。」それからねえ、別の子はねえ、「仲間のやつで授業全てサボってる男が木曜のTの哲学だけは聞かな損だと言ってます。」それからある時は、「ねえねえそうでしょ」って教壇飛び降りて、一番の前の子の肩に手を当てる、「ねえ君」って言ったらねえ。終わってから、「先生、何したんですか。僕に。」肩に触ってわかった」って言ったから、「触ってから、先生、僕、動けなくなりました。」起こるんだね。一種の催眠だ。それからある学生は「先生、質問、質問。先生、一つ聞きたい。」何。「先生催眠術どこで習ってきた」って。でねえ、結局ねえ三回に二回ぐらいそういうことが起こる。

しかし、講義でいつも成功していたわけでもない。授業もノート十分準備して臨むと棒読みになったりもした。しかし、逆に肉体的に疲れていたりする時に、たとえば、頭が痛い時には、思いがけないよい授業になる。T先生が言うには、それは、自分の力できることではない、「神の力」を感じた日々だったと言う。

ある時なんかねえ、講義の準備でねえ、きっちりノート書いてね。今日はきっちりノートに書いたから安心して思ってたからねえ、ノートを読み出したらおろおろね。みんな騒ぐ。騒ぐ。ほいである時はバスに遅れてね、遅刻しそうでやっと時計見ながら教壇に飛び

乗って、「遅刻してすみません。皆さん」ってね、もうあの何しゃべるかノートないわ。で、バスの中で今日のポイントはずっと見てるだけで。入ったらねえ、今までにない冴えた講義。

ほいで失敗もあるよ。おろおろの授業になったこともある。質問って言ったなら、とんでもない質問するやつがおつてね。それ一生懸命答えたつたらおろおろになっちゃってね。もう半泣きの気分で帰ってきたらねえ。一人の学生が追っかけてきてねえ。「先生、今日の講義よかった。」あんながたがたの講義、どこがいい」って言ったから、「先生、いつもまくしたてるばかりで、僕たち考える時間がない。今日はじっくり考える時間があった。」

もつとすごいわね。風邪引いてねえ。全然頭が働かなくてねえどうしようと思っただけ、授業に行っただけ、頭痛いんだわね。で、今日休講って張り出そうと思っただけ、八時半に着いて。もう学生早い子はもう来とるでね。で、申し訳ないと思って、九〇分のうち三〇分でもやれば申し訳が立つと思って、腹決めて授業に立つて。

「皆さん、Tのやつ今日の顔見たってください。いつも威勢のいいこと言ってるけど、今日はしょぼくてでしよ。実は風邪引いて頭が痛いんです。せっかく皆さん来てくださったから、ちょうど三〇分でもと思って来ました。よく聞いてくださいな」ってやり出したら、三〇分どころかばっちりやった。本当に冴えまくった。カントについてみんなしーんとして聞いた。これなんだろうと思うわけよ。ユングでいけば潜在意識とかだけでも、キリスト教で言えば霊の働き。「神の霊の働き」って言うんだけど。どっちでもいい

んだだけ、事実として思いがけない授業になるわけ。ほとんど毎回の、それは僕の方じゃないわけ。

今の心境

インタビュア当時、七三歳のT先生はD大学を退職し、週に二回の非常勤講師と週末の聖書の読書会などで過ごしている。今、日常的にどのような感じにいるか、最後に、T先生の言葉でまとめる。

はいでねえ、僕の本にも少し書いたんだけど、今の気分は、私、宗教は何一つとして信じてないけど、なんか神みたいなものを感じています。で、自分の中にも感じてる。で、生きとして生けるものに神様があるように感じる。そのようなものに心を向けて、夜寝床に入って一日を振り返ったりしていると、なんか本当に喜びと希望が溢れてきて、全てのものに感謝が湧いて来て。私、今生かされてる。ありがとうございます。皆さんにもよいことが起こりますようにと願う。皆さんの笑顔を見ると私もうれしい気持ちになる。私もいつも笑顔でいたいと思います。新しい自分みたいなね。で、前と変わったって。

そしてねえ、いわゆる宗教的に、仏教で言えば悟りだけでも、キリスト教だと、この間も言ったけど、回心。普通 conversion っていうと改宗の意味。改めてキリスト教徒になる。そうじゃなくて。

深い心が生き返ること。で、聖書では「それがまるで外から神の霊が注がれたかのように聖霊がくだる」って言ってるけども。僕は人間全てがあつて、なんかのきっかけで目覚めるので。自分の不完全さに気付く、それからリニューアル。再生する。それがどうやって起こるかかって言うのと、まさにこのテーマで、そんな自分を大きく包んでいる「美しい大自然」とか「愛とか友情、先生の愛」。そうすると、緊張が解けるじゃない。自分を責める気持ちが一応抜ける。そうすると、抑さえられとった良い性質が「わー」っと活性化してくれる。

「神みたいなもの」を信じ、すべてのことに感謝しながら、毎日を生けることが、今のT先生の日々の生活であり、深いところにいつもそれを感じているようである。

三、人生における「決定的瞬間」のについての考察

この章では、T先生が経験した転機について、その流れをライフストーリー的枠組みで図式化している(図一参照)。この図式の流れの中で、T先生にとつてもっとも重要なできごととは、「どん底」の夜だった。その出来事を「決定的瞬間」として位置付けている。T先生にパワーが出るようになった「決定的瞬間」のきっかけの「原体験は自殺しようとして、喚きたてた」「絶叫」の時である、と振り返ってインタビュアに最後に再度説明してくれた。

本稿では、今まで「神の声」が聞こえたという「決定的瞬間」が人の人生を変えるという仮説を持って、論じてきた。彼らは「神秘体験」を経験した人間であり、その「神秘体験」を経験していない筆者は、彼らを理論上は理解できても、それ以上になれないのではないかと考えてきた。だから、T先生が「靈的体験」をした後、「今の自分と昨日の自分と連絡がなくなかった」ようであると表現をしたのを聞き、それを再確認した。もしそうだとするならば、「神秘体験」を経験しない筆者のような多くの人が、「神秘体験」をした人たちの「語り」をいくら熱心に学んだとしても、それは自ら実感できない「現実」であるが故に、「他人事」であると感じ、その人たちの「語り」の真実を学ぶことができないように思える。T先生が生前のH牧師に、どれだけ熱心に祈っても、「神の声」は聞こえないと嘆いていた時のT先生と筆者は同じ水平線にいるように思える。

しかし、ここからは推論を交えながら、彼らの語りの「真実」の意味について、筆者が理解できる限り論じ、彼らの語りの「真理」は「他人事」ではなく、筆者にも意味のある真実を含んでいるのではないかと考えてみたい。もしそうであったなら、彼らの語りの「真実」とは何であるかを、「神秘体験」を経験していない筆者にも納得のいくものとして論じることができないだろうか。

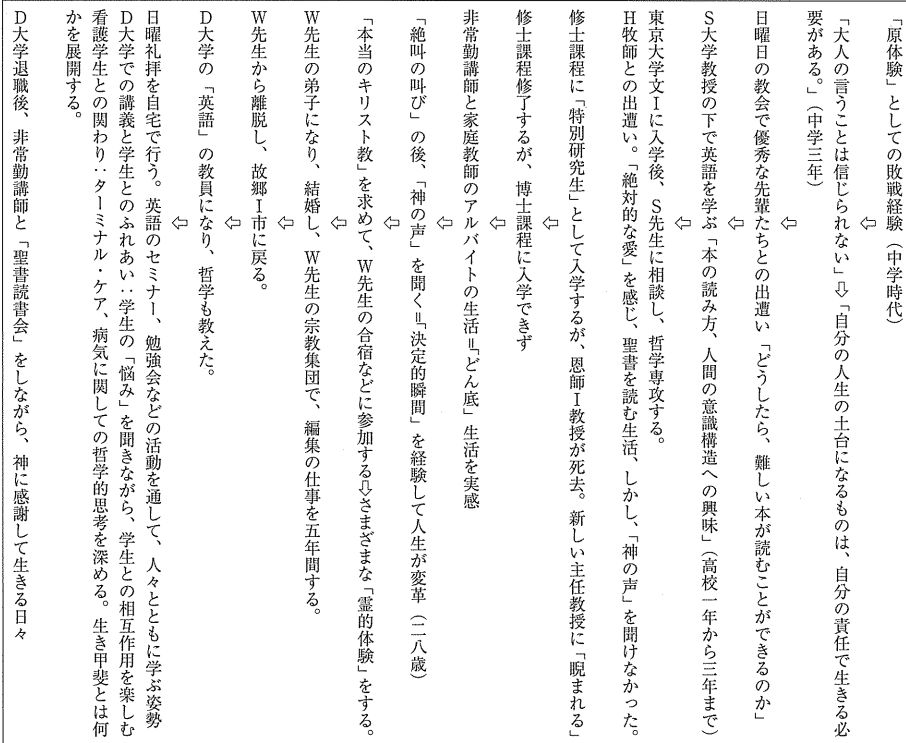
まず、T先生の「原体験」として、敗戦時の体験がある。敗戦当時中学生だったT先生は、大人は信用できないと思う、自分自身で生きるための基本的な思想を持ちたいと考えた。そのためには、難解な本を読めるようになりたいと思った。そのような思いは、S先

生の下で、英語を勉強する心の準備になっていたであろう。S先生との出遭いにより、哲学を学ぶように運命づけられ、S先生のアドバイスに従い、東京大学に入学した。法学専攻に入学したにもかかわらず、また、S先生のアドバイスに従い、哲学を研究し、大学院に入学し、研究者として生きる道を選んだ。そこまでは、まさに、研究者として、エリートコースを進んでいたようだった。

しかし、T先生が師事していたI先生が突然亡くなったことで、研究者としての将来が見えない状況に陥った。博士課程に進学できず、それまで信念を持って追い求めてきた研究者として生きる夢が崩れ去っていくプロセスに突然入ってしまった。先が見えない日々の中で、世の中が「真つ暗」に見えた絶望感。そして、自分の能力に対する絶望感。さらに、近しい親戚の人々たちからの否定的なまなざしの中で、自信を喪失したT先生であった。それに追い打ちをかけるように、健康まで害してしまった。そのような状況のなかで、それまでの自分自身の努力が無意味に思え、「生きるにも生きられない、死ぬにも死ねない」心理状態の中で、ある晩、自殺を考えた。

その「どん底」状態から立ち上がった「瞬間」を決定的であったというT先生。今までの人生について絶望していた時に、何百回も聞いたH牧師の言葉が思い出された。「すべての人が神様に必要である」というものであった。そのことを思い出した時、神様に対して、自分の能力の低さの「受容」を要求する「叫び」を発した。自分の能力の低さにもかかわらず、真摯に生きる自分の生き方に対

図一



して、「文句あるか!」という叫びを神様に向けて、怒りとして投げつけた。そして、「文句なし!」という「神の声」が聞こえた。T 先生も言っているように、音として聞こえたわけではなく、実感を持ち、意味として伝わってきたものだった。その「神の声」を聞いた後は、「ワクワクしてきた」気分になり、自信に満ちた自分に変革したと T 先生は振り返る。その意味では、T 先生にとっては、「決定的瞬間」であつたことは、T 先生にとっては、まさに「真実」であつた。

しかし、ここでは「決定的瞬間」を契機に、T 先生が突然まったく異なった T 先生に変化したという「語り」を文字通りに受け取るのではなく、人の「語り」の持つ人生の「再解釈」の意味付与行為と位置付けてみたらどうなるであろうか。この「決定的瞬間」を境に T 先生は「本当のキリスト教」を求めて、W 先生に出会い、W 先生の宗教集団の中で、数々の「霊的体験」をした。それらの「霊的体験」を何度も経験し、さまざまな「奇跡」が T 先生の周りに起こることを経験することになる。この五年間の経験をして、自らの信仰を信じ、W 先生に対しても批判的になれるだけの人格変容が起こつていたと言える。

そして、奇跡的な偶然の連鎖で、D 大学に就職できた T 先生は、大学では、哲学を講義することを楽しみ、自宅では、聖書研究会、英語読書会など定期的に開き、独自の「研究者」生活することになる。そして、さまざまな人々との出遭いの場で、自らの「決定的瞬間」の「語り」を繰り返して、著書にも自分史的エッセイ風にその

「語り」を書いている。この「決定的瞬間」の「真実」の語りを繰り返すことで、T先生はその瞬間の意味を再確認し、周りにいる人々と聖書を読み、自ら経験した「真実」を語り続けている。このように決定的意味を持つ語りを繰り返し語ることによって、T先生は、人々とその「真理」を分かち合い、生きる糧にしているのではないだろうか。

自らが「そのまま」受け入れられたと思う実感。そして、それが、自らが信仰してきた「神の声」として実感できたという「受容」は、T先生を変革する出発点となり、その後も、「神様」から与えられた、自らの役割を「受容」とするという生き方をする。「与えられた能力」であるので、それに対して自分は責任を取る必要はなく、与えられた能力を実行していくことでだけよいと確信し、自らの問題にこだわるのではなく、人生に対して積極的に生きられてきたのではないか。すべての人は神に与えられた使命があり、自らの中になるその使命あるいは「内なる意志」は活性化されるのを待っているとT先生は考える。そして、“Where there is a will, there is a way.”ということを若者に説き、その影響を受けた若者が、それぞれが持つ「内なる意志」を解放し、活躍する姿を見て、T先生もまた、自らが実感した「真理」を確認し、実践しながら生きているのではないだろうか。

その意味において、もし「決定的瞬間」が単なる一過性の「霊的体験」で終わり、T先生がその体験の「真実」を自らの人生で実践し、語り続けていなければ、T先生には本当の意味で変革は起こり

得なかったかもしれない。「決定的瞬間」とは、変革へのきっかけであったかもしれないが、その時の「覚醒したもの」を実践して、はじめてT先生のように人生の変革が起こり続けるのではないであろう。

T先生の「決定的瞬間」の解釈をめぐる

諸富さんは人生や世界を眺める立脚点のシフト（転換）が、個人の自己成長、内的成長という点からするとともに重要であると強調する。そして、その視点から人間を二種類に分ける。「共同現実世界の人」と「スピリチュアルな世界の人」であるという。「この世界の向こう側になにか、未知の世界があるようだ」と感じるのが「共同現実の世界の人」の感じ方で、それに対して、「未知なる世界」「みえない世界」「究極の一なる世界」の方がリアルで、それが「別の次元で姿を現したのがこの世界」と感じるのが、「スピリチュアルな世界の人」とその区別を明確に述べている。そして、「共同現実世界の人」が「スピリチュアルな世界の人」に変容する道が三つあると言う。

第一の道としては、特定の宗教的な世界観を持つ人が、その宗派独自の「行」を行うことで、心身の変容が始まり、実践を積み重ねることで、達成できる場合である。

第二の道としては、「臨死体験」「神秘体験」「自己超越体験」「悟りの体験」などのような体験によって、スピリチュアルな世界へと

開かれていく。この場合、こうした瞬間的な体験だけではほとんど大きな意味を持たない。きっかけとしては意味があるが、持続的なプラクティスにつながらなくては、真の人格変容に行き着くことはないものである。

第三の道としては、人生の意味や目的など、根本的な問題に悩み、その悩みを内面的に保持して悩みぬくことが「行」としての意味を持ち、全人格的な変容をもたらすものである。(二〇〇七年・一八九―一九二頁)。

以上のような三つの道という枠で考えるならば、本研究でインタビュ―し、そのライフストーリーを詳細に描写したT先生の場合は、第二の道であると解釈できる。T先生の「神の声」を聞いた体験、さまざまな「霊的体験」そして、時には、祈りで「奇跡」が起こったことなどはすべて、T先生の「神秘体験」の例であり、そのような「神秘体験」を経験することにより、T先生は、真のキリスト教の信仰を求めて、W先生の下で、諸富さんが言うところの「行」を実践することで、五年間師事したW先生を離れ、日常的に「神様」を感じながら生活する日々を始めた。そして、偶然得た、大学教員の職を「与えられた使命」と感じ、自分と同じように、自分の能力に劣等感を感じ、「本当の自分」を発見できていない学生たちに、講義を通して働きかける生活を実践してきた。大学における講義、さらに、看護学校の学生たちを相手に「人生の意味」について講義し、語ることを通して、自らの「神秘体験」で実感した「真理」を伝える実践をしながら、生きてきたと解釈できる。もし、あの「決定的

瞬間」の一時的な興奮状態あるいは「頂点体験」として終わっていたなら、今のT先生は存在しないであろう。「決定的瞬間」で実感した「真理」を学問研究や聖書の読書会という実践的な「行」を行うことで、いまのT先生に変容していったのではないだろうか。そして、その「実践的な行」は必ずしも、諸富さんの言うように、問い続ける「苦しみ」や悩みぬく「行」ではなく、周りにいる人々を勇気づけながら、自らも勇気づけられる個人的研究会や読書会でT先生と取り巻く人々との「対話」あるいは「語り」であり、それが、教育者としてのT先生の「行」であると言えるであろう。T先生はまた、学問研究としての哲学の思想家から学び、自らの「決定的瞬間」や「霊的体験」の意味を認識する「行」を行い、そのことについて語ることで自らが変化していったのかもしれない。

キャンベルの神話学から学び、自己の体験を分析した上で、ロバート・アトキンソンは、人間の変革にはすべての人に当てはまる一つの普遍的な青写真があると言う。その青写真とは、三段階に分かれ、「始まり」「葛藤」「解決」あるいは、「別離」「行動」「帰還」という「神聖なパターン」の枠組みで語られる。

まず第一段階の「別離」は、新しい人生に向かうための「冒険への呼びかけ」から始まる。心理学治療における一二段階プログラムの中ではこの「呼びかけ」は、自己の無力さを受け入れ、回復へのプロセスを始めることである。最終的に自分が生まれ変わるための助力となる自己の内面を真剣に見つめる経験することを再評価すべき時である。

次の「行動」の時期には、「より大きな困難」に直面する時期だと言ふ。自殺を考えたり、個人の信条と行動の狭間の葛藤で苦しんだり、仕事に就くことができなかったりなどの他のすべての個人的な苦悩を経験し、最終的には自分が浄化され、自分のすべての側面を包括できるように導く時期である。「受容」がこの過程で重要であり、いままでの自己を捨てたり、始まりを意味する象徴的な死を実際に経験する時期でもある。この時期の変革は、自分で起こした変革ではなく、自分にたまたま起こったように思えるようなものとして、過去を振り返った時には思える。

第三段階は「帰還」であるが、再生の経験や平穏さの感覚を味わった後の試練、次に何をすべきかどうかという課題に直面する。今までいた場所に、自分が達成したことを示す何か特別なことを持つて帰還することである。自分が変革した真実を他の誰かにどのように伝えるべきかを考える時期である。素晴らしい体験後、日常的世界に帰還し、それをどのように実践するか課題である。最終的には、「神聖なパターン」を成就するために、そこから得たものを還元し、いつも成就の過程にすることが重要であるということに自覚する。その一つの見方として、宇宙の意志と調和する意志を獲得するためにもいつも努力し、自覚的に生きることがこの時期の課題である。

この三段階の変革のプロセスという枠組みで、T先生の「決定的瞬間」とその後を解釈したら、どのようなになるであろうか。T先生の「決定的瞬間」に至るまでのプロセスは、「冒険への呼びかけ」であり、大学院に入るが博士課程に入学できず、いままで夢見て目指

していた研究者の道が閉ざされ、そのままの自分でいられなくなるという葛藤の日々であった。

研究者への道が断たれたと絶望し生きていく中で、いままでの自分を振り返りの時期。そして、その絶望感のなかで、自殺まで考えた時に起こった「決定的瞬間」では、自分の能力を「受容」し、そこから「行動」という新しい時期に移る。T先生の場合は、「神の声」を聞き、「いままでの自分」が「気弱な自分」から「元氣いっぱい自分」に変化した。そして、W先生の宗教合宿に参加することで、「神秘体験」あるいは「霊的体験」をして、「昨日までの自分」と「いまの自分」が繋がっていないという実感を体験した。そのことによって、T先生は徐々に「象徴的な死」を経験し、再生していったと言える。そして、自分が経験したことを実践していくなかで、「新しい自分」として、自信を持って、W先生を批判するようになる。この一連の「霊的体験」や周りに起こる「奇跡」の数々を経験し、自分に変化が起こったことを自覚して生き始める。そして、それは、「外から」の変化であり、「神様」とともに生きる生活であった。この体験の「真理」を伝えるべく、大学教員として、その「決定的瞬間」を含むT先生が発見した「真理」を伝える生活で生きてきたと言えるのではないだろうか。

四、結論…人生における「決定的瞬間」の可能性

T先生のライフストーリーの語りの中に、誰にでも起こりうる人

生における「決定的瞬間」のメカニズムについてのヒントを得たように思う。

まず第一に、実感として本人が覚醒する「神秘体験」は、個人の人生経験のなかで何らかの条件が整えば、起こるという認識を持つことが重要である。T先生にも、一般的な意味での「神秘体験」「霊的体験」は、何か「異常なもの」「特別なこと」という思いあり、自分とは「別世界のこと」であるという認識であったが、何らかの条件が揃えば、だれにでも起きうるものであると理解できたように思われる。それは突然の「気づき」あるいは「覚醒」であり、実感できるものである。しかし、その「覚醒」が起こるまでには、本人自身がそれぞれの「苦悩」や「問題」の追求が不可欠である。T先生の場合は、憧れ求めていた夢が突然閉ざされ、エリート道から転落していった絶望感と「神」への信仰がその重要な要因であった。

第二として、「決定的瞬間」が起こる「覚醒」は、自己を超越した異なったレベルあるいは「外」から起こるという特徴がある。T先生の場合、「神様」に叫んだ時、まさに、「神の声」がT先生を「ありのまま」受け入れ、「文句なし!」という返答を与えられたことで、T先生が救われた。

第三に、「決定的瞬間」あるいは「変革」が起こる時には、自己をありのまま受け入れるという「受容」の態度が不可欠である。「受容」する前提としては、自らの弱点、自ら隠しておきたいと思っている問題や苦悩を現実であると認めることである。塩尻公明は苦悩を経験しながら、「受け取りの一手」という態度を取った時、自ら変える

ことができない、弱点や悩みなどを「そのまま受け入れた」うえで、より積極的に人生を考えるようになったという。劇的な「決定的瞬間」とは少し異なるが、「受容」した時が、その瞬間になっていたのではないだろうか。その意味で、社会的なまなざしや自己を規定している社会的なものにとらわれ、自らの強みやポジティブな側面だけを社会に対して自己を呈示し、生きている限り、内面からの変革はあり得ないようである。

第四に、「意味ある他人」との出遭いが「決定的瞬間」を起こす重要な要因であろう。T先生の場合、恩師のS先生との出遭いとH牧師の出遭いは決定的であった。またH牧師は亡くなってからも、T先生に影響を与えることになる。「死者の遺志を継ぐ」という思いで、T先生は、H牧師の信仰した「本当のキリスト教」を求めて生きていることになった。

第五として、「決定的瞬間」は突然起こったように思えるが、それは、それぞれの人の人生経験の結果であり、そこに至るまでの必然的な流れが存在するということも重要である。大平さんに起こった「決定的瞬間」も、それ以前に、「自分をありのまま受け入れてくれた」祖母が亡くなったことで、「悔恨」の念が働いていて、変わりたいという心の準備があったからであろう。本稿で詳細に描写してきたT先生の「決定的瞬間」に至るまでの人生のプロセスがなければ、そのようなことが起こり得なかったのではないか。その個人誌の結果として、自己変革につながる「決定的瞬間」が起こるのであろう。起こる時は、本人にとっては、「突然」のように思われるが、

個人誌から見ると「必然」に起こるのであろう。

以上五点が、人の人生における「決定的瞬間」がどのように起こるかの特徴的な要因ではないかと思われる。

本研究のT先生の場合は、「本当の自分」を活性化する手助けするために、周りの学生、人々との対話を通して、自らの「決定的瞬間」の語りを伝え、自らもその語りを深化、展開させる実践をしながら、生きているようである。筆者は、強烈な「決定的瞬間」をしていない人もまた、それぞれのなかに「決定的瞬間」の真実を見出せる可能性があるのであるかと思う。その方法とは、自らの中にある独自の「物語」を語ることで、自分が直面している問題、悩みなどを見つめ続け、求め続けることで、「決定的瞬間」を「覚醒」し、それを語り続けることで、自らが与えられた使命を確認し実践することではないかと思う。

注

(1) このインタビューは二〇〇七年二月一日に行われた。T先生の自宅で七時間一分程度行った。久しぶりにお目にかかったT先生は、当時、七三歳であつたにもかかわらず、その話ぶりはパワフルさで、筆者を圧倒した。T先生と筆者の関係は、「恩師と学生の関係」であり、先生の体験を学びたいという態度で臨んだので、あいさつや筆者がどのような研究をやっているかなどを含む最初の数分とライフストーリーに関する聞き取りがほぼ終わった最後の三〇分の対話以外は、ほとんどが先生の語りだけが録音され、インタビューの筆者はほとんど質問もせず聞いているだけである。T先生を情報を持つ受身的「回答者」とはみなしていないという意味では、ホルスタインとグブリアムが提唱する「アクティヴ・インタビュー」を行っ

ているが、インタビューが積極的にインタビュープロセスに関わり、調査対象者に積極的に質問をするという形式で、T先生のライフストーリーを「協同的」に構築しているわけではない。むしろ、アンダーソン(二〇〇一年)の言う「無知の姿勢」でインタビューに臨み、調査対象者であるT先生の語りを文字通りそのまま聞き取る態度を取った。たとえ、筆者の常識では信じがたいと思った語りであっても、T先生にとつては、「真実」であるとして、聞き取りを行った。

インタビューで問題とされる権力関係については、調査者である筆者と調査対象者であるT先生の関係性から、調査者の権力が調査対象者に与えた影響は最小限であろう。しかし、そのような前提があつても、尊敬の念を持った調査者に対して話すT先生の語りは、その関係から生まれたという意味では、両者の相互作用の産物であるということを否定するつもりはない。

インタビュー調査を実施した日から、本研究をこのような形でまとめるまでに予想以上に時間かかったのは、T先生が著書の中で自分史的エッセイをすでに書いて、その内容を踏まえたうえで、当事者であるT先生とは異なる書き方がどのように可能なのかという筆者の葛藤が長い間続いた結果であつた。また、インタビューをした後、恩師として尊敬するT先生の哲学と宗教学における博学と研究の深さを知り、T先生の語りを理解するために、T先生が読んだ文献、さらに、研究を理解した上でないとT先生の人生について書くことはできないのではないかと思い、自分の専門分野以外の文献を読むことに時間を費やしてしまったことがある。しかし、インタビューから三年間の時間が流れ、何らかの形で文章にすることが、研究者として、T先生が協力してインタビューに応じてくれたことへの感謝の気持ちを表すものだと考えて、本稿を書いた。T先生を単なる調査対象者としてみなしていたならば、この三年間の間に何度かインタビューすべきだったかもしれないが、T先生の学問的背景をしつかりと学んでから再会したいという筆者の思いがあつたので、それができなかった。T先生への言い訳として、ここにそのことを記しておきたい。

(2) T先生自身が自らの自分史的エッセイを含む著書を書いているが、匿名

性を保つために、参考文献として掲載していない。また、本稿は、T先生が書いた著作を参考にはしているが、インタビュールにおけるオーラリティを重視し（佐藤 二〇〇八年、小林 二〇〇九年）、データはすべて聞き取りのものを用いている。インタビュールそのものは、三年前に録音され、トランスクリプトにされていたが、本稿を書くために、三度「聴き」直した。「聴く」ことによって、文字化されたトランスクリプトでは読みとることができない、インタビュール当時の「現在性」と調査対象であるT先生の「声」の調子などから読み取れる感情や理解も深まったように思う。それは、小林（二〇〇九年）が言う、オーラリティを重視したライフストーリーを指すものでもある。また、筆者が行ったインタビュールの内容と自分史の内容を比較した研究では、インタビュールで聞き取られた語りは、自分史で書かれた以上のことが表現され、その生き生きとした描写を感じ取れたのである（塚田 二〇〇九年）、本稿においても、インタビュールで聞き取られた語りをを用いている。

参考文献

- アトキンソン、ロバート（塚田守訳）『私たちの中にある物語』ミネルヴァ書房、二〇〇六年
- アンダーソン、ハレーン（野村直樹、青木義子、吉川悟訳）『会話・言語・そして可能性』金剛出版、二〇〇一年
- 大平光代『だから、あなたも生きぬいて』講談社、二〇〇四年
- 小林多寿子『声を聴くこととオーラリティの社会学的可能性』『社会学評論』二〇〇九年、七三―八九頁
- 佐藤健二『歴史社会学におけるオーラリティの位置』『日本オーラル・ヒストリー研究』第四号 二〇〇八年、三一―六頁
- 塩尻公明『あなたの人生論』学生社、一九六九年
- ホルスタイン、ジェームズ、ジェイバー・グブリアム（山田富秋他訳）『アクティブ・インタビュー』せりか書房、二〇〇四年
- 塚田守『庶民によるかたちからみた戦後の世相史の社会学的研究』平成一七

年度／平成一九年度科学研究補助金研究成果報告書（一七五三〇三九六）二〇〇八年

諸富祥彦『人間形成における（エゴイズム）とその克服過程に関する研究―

「主体的経験の現象学」による接近―風間書房、一九九四年

『人生に意味はあるか』講談社、二〇〇五年

『生きがいの発見の心理学』新潮社、二〇〇四年

やまだようこ『喪失の語り―生成のライフストーリー』二〇〇七年